湖月抄

にほ

17

須磨 細 巻之名以哥詞号之源廿六歳の三月より廿七
年の三月迄の事あり廿四歳の秋より廿六歳の春ま
ての事物語にみえず此内に源の除名なとの事もある
へし桐の巻乃末の弘徽殿の讒言より遠流あるへき定めな
ともありけるをやさしやうの所をおもひたちて須磨へ行
ひすまへかるゝし物語の書さま妙也 抄 除名とハ成にあたられる官位
を除く義之 河 光源氏謫居須磨浦之故為巻名 抄 須磨とハ仁義入
書朋友のなりしひまてことくもこれを除く 孟 入道右府 称名院 云
毛詩三百篇ハ思無邪の三字にこもり風雅ハ無邪心肝要也
源氏物語をハ識者必表乃知かて見るへし之道理をも知へしハ百
事にかゝる也毎句の心をかくのことく答なる也

世中いと 細 世の物むつかし
うきこと也 孟 花散里の
巻に大后の世になりてこうひ
てとかく何につけて
いひさわく弘徽殿の
強かりて左遷あるべ
きこといふなるべし 明 源
氏君遠流あるへきなど
定ありけるにや遠国に
ともかく流されんを思ひ
てミづから須磨へ下給ふ
ともかくもなりなんとても
細 此まゝ籠居してあらん
べくやともたどり給ふ 孟 源
の遁塞あるべきとおもひ
まくらもぞしられまさる
るすとハ遠流に處せられ
ていふの罪科あり重罪
ハ此罪科ハ近流也
抄 須磨のうらの罪のなき
ねのぬれぎぬもかつきてもよ
本体の時にあひて見よ
つまりさる罪にやあるさ
らんと思ひてつゞくへ

世中いとわづらはしくはしたなきことのミ
まされバせめてしらずがほにありへても
これよりまさることもやと思しなりぬ
かの須磨は昔こそ人のすミかもありけれ
今はいと里ばなれ心すごくて海
あまの家だにまれになど聞給へど人
しげくひたゝけたらんすまゐはいと本意な
かるべしさりとて都を遠ざからんもふる
里おぼつかなかるべきを人わるくぞ思し
ミだるゝよろづのこときしかた行末思ひつ
づけ給ふにかなしきこといとさま〴〵也
うきものと思ひすてつる世も今はとすミ
はなれなんことを思すには

も陽君あるんとおひあかし
かの沈むハ　細 源氏のかくに陽君の子ハ光ずして八行平卿沈みなきてゆかれしゝ文
用公旦鼎銘据萊本の謹言ふりて東征せしを専要とし又菅丞相ありて宰府
赴任とり又野相公陽侯乃国へ流されし例を以て書り此外多し
吟ノ十遠かゝしに五大旗旨成ッしく一卯とかりて春を生まれかへし此意ハ行平
どれかりを霜く行平八我と蟄居しうちて源を我と蟄居ましとひく
行平のうよ叶つり　細 周公旦東征のわしとおそ風雷の変異もお例より名披露
日文王の子武王の弟と源の自称せしゆへ周公旦よりぞしてつう　略記之
ひとつあらりん　細 知ノ河苑書之人をけくうすびもらきんを　明 愚案滔ハ
矣二点滔天尚書堯典二帝曰庸違象恭滔天二注滔漫
矣言不可用又云浩浩滔天注盛大若漫天　細 ゆらく八滔の字ハ人をかくあぎ
わくしき示ともいへてまさ曰　孟 人をにき帝く桃奉進ことく徒ハ
へりろく人めまろきなく陽君の浩美極るすべし祖嘉どもろへゆを人めまろさといい
かるなり
ゆきさめぐりてまさあひ
こんうを
或おいかの革の名おへてま
うばともりめぐりてまも
わりんとなる寿青新佐
おうう為　引ま乃名を

まれなんことをかがすまいと揖ぐたる
とおもう中なさ　孟 業之　姫君のおまくれとそ
へてもおひかげきまてる海のなかふりに
さはおまごとみをそぐれて哀なるとも
めぐりてもまさあひなんことを

花一二日のおりと
孟 一二日の後ろうとくし
お 雲林院にて法文を宣
あひし時の事鉢をとり
あり
めくとせそのおりと
お 朝にまりて流罷なども
なりハ赦免などもあるべ
し是ハ心とんりま
へ遊ぶなる
あふそうどりよつてまて
河 我恋ハ行平を恋ふる
てもすあふをまつりと
ありふそうりぞ　細 哢 孟曰
やがてまうるべきうらそ
細 門おせ八うらそめのおひ
おてぞ思ひしと八陽りの
うじて浦めり源のくう
つるの別まりやとおひ
まかよ一　哢 孟曰

とおもんすてさまれ一二日の後こそ
くるあらしくれあかりぐるよとりかの
かずさ海よおもく女君をん須そうの
をおりふすまるといくとせその程と派
あることみもあくずふるをうちまりは
へござりゆんをさぜめまする世よやがそ
まうべきうらどてふりやとひそうおかり
すへ志のびくもろとくまよまやとおもりへ
まりおりあれどさうへ須磨川
らのなさ風らりかまよすらもらずおん
をなうくんまうさうつうしすき浦き海まそ
あずらずまへてんをいとつまあくてそ

いうしうんたみも
お紫のこと此世をすゝめ所之
こともなり 師 こゝろ花を
ふたちりともこと
をむけて
おさやくの口ひきをの給
ふたり 師 あつかえ
さへのあさねともこそんば
への此のむきりのまふ
とく
ありしかの人すこしそ
おぼんど源の御ことは恋
こゝろふかくいなし只ん
身ひきかあすのうへ之
此所かげよ お源の内陰う
うつしとく此人花ら
さしの老まえしう
入たのこやう 細 春畫風す
せ家まて神く入たとえ
し男女よりひて入た
の是あるし何男女にさ
らば弘法のたよ入を八字
入たとそうそうし藤原導
廿二条関白頼忠女[illegible]

んふもやく物さひのつまなるべき紙をみて
(おほのこと)共わしへもてまゐ(孟党之)女君はいつじうん通ゑ
をとくれさそもくるあしでとりむ
そそうめしげみ共ほつうつの花ら(細 ここ一節よ)
(源を墨絵入母)里ふもおりしうよふっこそまれなるれおう
ろほさく衣ありつ御ふ称をこの御けふ(花宴ハ源の此えぐここふ)
(てる子すこと)うくれてりのしまへいをじうかしげき共ば
しころさ源いとこしうあすむ紙ざり(太さ子ものこと)
あくも日のうちそぞそしまちうとひ給
ひし御ぞ人きれぬとくふこすゐ人ぞ
共日うりけるへたの友よりも物のゆかしや(お太后かとを怪の表)
(春のこと)まさいうちなまれんと我此めあ川く

右天禄四年三月十九日
藤簡世ニ号ス入道文ト
すゆくつり 折今ちう
に超よし給ても春畫
ハお家の内房されバ曲を
みしとくよふうく大殿を
さよりの中の来りうれ
と源のこと
三月つわれり
細 高明又左近三月廿六日色
花 西宮左大臣左近安和
二年三月廿六日左近太
宰府ニうつく
いつかとしも恋てせ家つそ
お給そうれすふ定日ども
世上へ恐ろく太后うさ乃
害しを共おもをゆへ之
いとうしをうる 細あうに
以えども奥よお立給す
ハあり也此第法あまさ
所よありんてをつじし
文ぞうり おせどをから
あふゆへよろづうハ共も
せむも此文ぞりふて源せ

おしかれど思ひつくれとふくひつねよ
ありむうし(おきよう源のこと)かやうよあひ共かしおそれを
もろせ給へまうげとちらさひ出給よさ
とさ源でよふをのさつてもどべうり来う
人のは(ひきもり)契られとつくさひさくそうふ
三月さ川らあまうつの日じゝよるんこや(只之まとお)
(まふそハお人先おうより此定)むるれ給ける人まいまとしも恋てせあ
もほじうていとちうう川りまつりなれ
うろうちう七八人(お女人まそ事を出すこと)ぞうり此とまそていとう
をうめて出さら給さるべき所ぞよ此文
ぞうちらしのびまし小もく秋しこの
ぞうふりき川らしまへ御いこロごゝろをも

まぬべかりしどぞ。あやりのへらるれまり
ざれば。ちかぐくろきをこそ。どうまでぬり
（お 京を出ありん二三日ありおこ之 細 役紅の事いふ也 細 葵と世と二段）
くり二三日ありて物月いかのまよにいふくれ
てもさつらう御へつるあやしろ車のうちやけ
（世親の家よりさき之）
まろよ女のやつふかくうろへいりあそびと
（孟 葵上のあやし事之 叙るゝ之）
あられは葵とのを物がたりいひしまひし
（細 夕霧之 お 夕）
げはうらあまりうちてらしてわかきの
（孝武時大臣之）
れめのしどきじり。ふかしひしくの中よ
（お 葵上の事女之）
海うぐちくねうぶりうくまでうまうる
とめりしぢり出てておとゝのかりけ
じひてさをてまつるようけてをごれ
りのあらくねまゝさくへでよへ世のつね

ら何ぞなり
そのありのぬるられまぞそれ
細 京より紀之 曉 例の紫式
アラ細之三云 弐ア八西宮
左府の学ひ人すてまし
うぐ右近のおろまぎれ
とおりところく 但物語出
物ちびて左府右近の年
と遙まで隔りそり不叶
まつと紀 師 安和二より寛
弘のつめまで八四十年八
りり也
またはられて 孟 ひるハ将り
あるかぢるは移る妙ぶへ返
てあふ之 師 嘆二ハ世まく
れ也世ゝ思ひ之ゝく
悪ころや 孟 あんとよめり
あしろ車
お 女の乗用る車之合
母ふ所の事之 沙汰せく
人ま札おじもおさし
河 網代車之 榮花物語云
おやしのおどろ車まて破

なさるひとられて。囲よられてりもらば
ハらくけらしとぞれらしてゝおつてより。
（細 冷泉院也）
ひさしき程は忘られぬるこそ家なれとく
おぼえることへ給へるは今さら思ひてけり。
（お 役仕大臣）
地ごしくまさにまりまでゝあいめしあん
まづれでま二りしせまへしん御ごかる
とゆしぬ 前物語もちりきてゝさく
きんとこまかれど。方のやまひをりさ
（細 …）
（孟 役仕表なき之）
よりお月やげれもつうまかくしんぐ
（孟 …）
ぬそもうへしてまうで 何ゆまいなさ
（くしうろく之）
らずるかは一のべてなじとりのくるこ
（よハつよりまつらどて源も八条とよとともれてける事也）
えひがくしるべくなん。今は世中でう

右近の将のまて
まろき人くる人 おもとう
人のものさまじくちすは
やうん
久しきおどよ お 久しく
見すぐぬよ夕霧の兄
在れまくねとおもんと
まつく
れくよこりし也 細 左大臣
の御原の除目まてそ 花 社
なきなるべし お 源の除目
までおゆそるをしてこそ
二年の夏より此三月の
よ物語の面よかられた
事まくり
くおとくべし 河 役仕ハ辞
官不肆位 よく 階位とや
むかふ八罪科あり河の家に
今位ともふへもととおわりぬ
白 お 是ハ家の事之 位
のうきよあるきれ 細 河
うのくく 同 勝を座すり
八宮位の礼也今まきうし
をのぶうハ術退のらく

蟄居せる人のかへおおりくを勝とのもとよふかかなれの事侯役位の表とさ
てまかりて隠居のよしとまうし籠居とハ又おりくといひとれん播の言くてしと
係りかくハ河海の義あやまれりしや　細河海よ退体とおりしおちる破きく世絵
貴元河海の説も可然　元明元年に賜れら給ふべしれの男よハありのくいはれていせ睦の職を
今ハよのなかおまと辞して出仕せざる時ハおかやけのとかめもあるまじきをするれ
じくハ国政の政のまつり侯るかれよ法度のきびしかりし
わめれきさと　細わけても
係の此身のえよりやうの
年よるべきと人思ハざり
しのりなかり晴れまじ
きこしるれじ　明日
花うちの地位よおめれ云
ことをさらにまよるるをと
もうくれるすハおしじと
[illegible]
切皇后三韓を征し給ふ時
新羅王のちかひの詞よ
東の日のよ西よりひがし
ゆきるれ河の流さかさまよ
すれば此のえのかりて
異とる人かぎりハ云
なきと退散せじとい
へりちかいもとるかう
おれ川も新羅の国なり
おはせ給ふ引き及いざられ
ころくのときくくり
孟天子不忘入不忘公
うてて官爵を
細除名の事名あるよみて
より元友爵をとらる
とハ除名をいふなりおが身
よりなさくなりあるる友
位をことごとく除くる也
位の人ハよからぬと云源
氏よ除名せしあつて
よりて主文のるとしを
言語とみくしより配流
の人を称せん除名なる
まし除名ぐらりゆそ
流罪せし事の事とお
つきそれハ罪の軽さによ
ありく源氏の除名ハ尤
近の例を用ゆるべし
まへことあらすつくに
か新院とかく罪ありて
つくよ歩こるすらく八分編
のすく是ハ罪のゆへと

すくてつゝにわするゝゆへ
三位ことなかりしとて
師或説源光の罪ハ朧月
夜の記されど深細つら
でふびらきさんもとつしな
きよしに源じの事と也。
孟説物之朧月のるハ夜ト事
のけんよ添らせましれ歌の
老ゝよさもふハさんにまけ
かくるしきんのわたゝ
ひあらしとぞ申侍りて
といかさせらるゝ[illegible]
ちくされど此あはハあらば
同書よ此説[illegible]
右案ハでんと愚按の[illegible]
れ着るのつゞれ記ぬべし
り侍らせ侍るのしく
師 あらひのよ在ぞの何有
らむこいふぶり源の此事
とあぶんとく

こゝろし給ひつゝ 細古注の源と大弐の[illegible]
しの給ひしのけんおもしろう出たるに。
[illegible]
[illegible]
[illegible] 孟 源之
[illegible] 師 文意之
れしれはなれくてもしき[illegible]
[illegible] 細 [illegible]の句之 養上をいふ
[illegible]
せるくのを今よるあはひなくるハ[illegible]
[illegible]
[illegible] 細 寿[illegible]
[illegible]
[illegible] 細 文意之[illegible]
[illegible]

[illegible]の人も 細 右箇ノ句
聖廟なとく讒言のため
朕源をとまげうれて
あし 師 古の人も流され
に必犯罪の人のといろ非
罪よおもろみもあり 此説
讒言によりて無実の罪を
しとく
されどいひしつ 師 罪なく
かして罪にあふ人のす
くそれも実なれど讒
言にも何の[illegible]
とも謀反[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
師 源氏ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]の細くやうの段のあ

くまなきひかりの中によく[illegible]
細 源よ夕霧の[illegible] なりひきしぬ月やへぶらり[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
師 [illegible] [illegible]
細 大臣の[illegible] 師 源の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible] 孟 [illegible]
中納言[illegible] 御酒
[illegible] 師 菱の[illegible]

しきみすとつくも墨染
無紋殿紋ゆるくなすを
くろきすぐひすら服代り
いふ事也
又たこえよ　細いへんと見れ
ないいかれぬもいふ也
咲右あれんともあり
奥入以八丈子かくろ引き
條件の秋二条やられと
とふ人もなき　奥年
以でえよいそねハむなよ
さハられても[illegible]よ
ぐくみのか　花物語
明ぬれば秋ふかく
細三月末の衰氣なひ
今　抄源の衰をとぞ
まふハ大[illegible]七六月とある
べし[illegible]ハ七二[illegible]の[illegible]と
え[illegible]明云左近
月七六月しおまあり

ほ前よさらでも世のそ、物語などし給ふ中
将人もいけよこによる思ひ給ひて中
細葵の上の女房也　盃源の心をよせたる
納言の君ハ人じ[illegible]まして[illegible]
抄源の心
人知れど衣と物見をも人られたりぬ
ふよとりもそてうつしひ給ふ細葉上役之盃中納言
の君れとまりまうく
とまりまつるなる人し明ぬれバ秋ふかく
出給よ有明の月いとおかしう花の本と
花のおりろうろかへかげ
をやうしまり見そてまつるなり本陰乃
抄詩にも春霄消ど[illegible]作り
いとおもしろき庭よなかく奇きなり
まろそこハなとなくなすとあひて秋の霧
のわれよ[illegible]くきらますれりと[illegible]の
抄源の君之新日是[illegible]
まわらんよと[illegible]ろそどうりかげ

長らくおきせ　細世と[illegible]
以給[illegible]也　抄あくるり
まふゆへ大[illegible]の對面[illegible]さ
うかり
き[illegible]りりさら
の主世よハクりりさるし
盃葵上　ましき[illegible]に
とく八ぬりまふまじき[illegible]
わろしさ　細夕霧のみ
也夕霧にいとあひとし
まへりとく盃夕霧の花
き[illegible]ずてハ内遊[illegible]

めぐ給中納言の君こそなりとらんとあや
細源の御心
つまぐとしめけくぬくら、まさ君いめん
おもんことをも、らへハいとろこそれりくん
抄中納言君ハ細く心安くえすべきなり
きろ世をとえりて心やすくともありぬへくり
しもとし源の後悔之
に月ばとさしいとそぐ源りよなと
入そ
抄中納言君の事也
のきんハいりのとまかすさてけら君のため
抄夕霧の事也
さいしやう
のと宰相のさうして、宰の君まへより出せ
細大宰よりく
細是より夕霧の詞也
こそと劣しきてりやげかしといこなし
まかりしき給さくんしれえつりなぐらき
めうひ給ふ給よいと秋ふかう出ませ給
なりもさ夜なくさらくらの[illegible]給
あられ心ぐらうしれ人のいさこなけき[illegible]ハ

へきるとなり
とりへ山　細　妄物なる也
蒙エと云ひさまま
也只今次ニのうくに云ひ
ならし也
暁のわかれハ　細　寒相栄ハ
まさ室うし江文通別賦ニ
大黯然銷魂者唯別而已矣

あかりやまとつれ世の始をそでとさて〱また〱
曳ぶらきまそ　孟原之　花鳥辺山の煙ハ中でひの上の事也
とりべ山もえし煙もまぶふやしあすの
煙やくらみゆをゆくはく〱しとよすく
らひずしまそし暁の別へうきのうやハむげ
くしならぬひさりまくる人もあれんし
とのまへいいつらすく別しいのりじそう　細　寒相の衣之暁月
うそ待かならすみとげきハ様あくひあ
あまじうむひまへうて程のれとそふまし
まそげよあさきうしん地りへ思しも粉　細　人文への旧友
まほしきとも夜してふすまん〱
うじしをほしれ待か程にしうくしせさに

いぶらころきさ人ハ　妙　夕暮
とあそてハうきせのかりし
ともあらねべうれハ中々
又さもぬとく
とくかわうそぶるよ
何虎狼荘子仁なきめ
虎狼よるなるう掛あしこ
れむさも表をうくべきを
仏涅槃の時ハ虎狼も尾
をむひ人をれぶりて悲しむ
とく花一年よハ鬼きとだ
とうきのベーしとわうふ
ハるあじきさ　細　深世
ましていうしなく
元服の始まりえをなし
人並く　明　妙巻ハなりて
ともふ御さえをそつり
まくしく　孟　妙紹あうとん
しそうう程よりくのそく
あられハおきとうけぐそき
く業子地し　細　うりべ山の
なき人の
なき世わの中とおほるで
程すきし人の煙ハ猫の

まへぶらきこうきさ人ハうきこ海へんようけて
をしゅしう世のぐれりうせひまうれ
めぐされハんつうくとかさまへ〱して、いそ
ぶさまぞ待とうく程ぬまな程を、人を
のぞうそそてさてまうゝ入ることの月いとあ
うさよいうそか海めうしうさうそ
ゆとゆかひさう酒とうら地用みたふに
とりきめべしましていさけなく地
そし程うりきうそまうそめてうし人で
うれへさうし入あさきれあるき海をいそで　細　なき人　世　まきやの旧
とむふまくとやれいうへし
うきき人の煙やいとゞつきとん煙と　大笑

甍之物とせ　暁　此乃所
白くしろくちり深のあ
よりくちり　孟　秋の名ち、
を出て花なき人のけ
ゆきへつくらんとし之　抄　も
八種のさら出がちふさわ
ときく
ゆくしきまぞ　抄　葵上也
のみゝ

まどろみまれ
抄　皆紅の衰へ用をこのさ
め出さり出へ人なりとを

我せくつとひし
孟　門お雫露落　鷲志
絲有　抄　月

ありし雲ゐすらでへだてゝ哀のこへ（紛ともなく）（源氏之）
きこえし、出給ひぬる名残、ゆかしきまで（へきこ（抄　源の北方之八条の封之）
めぐり、よめおいしられハわかれゆくこの人（細　二条院之暁月）
ごと、わがとみまでからるる音色よそ斯くま
出まそておさまりとのみ世をとぶらへし
きたり、ふとしひゆはさへふう行ひうま（二条院の御(?)之）
つゆならバはにとさとよゆゆうくべきぶまう（源氏への情に之）
けしてはかなきの別おしむほどもなや。
人めをもすしさぬ人ハとのうひまかる
もとよりきとゞめおりまぜつきことま
されバ恋をくやしとひしる車のうへまで
くるしからぬ世ハうき物までりりと（源氏）

ざいんるど　細　殿上よまき
花基盤(ダイバン)殿上よまきひてし
く用しまぬだよまらり
げしかなり　仲　基盤
と八給ひのつきそ用ゆ盤
とや
てみ所くりえし
抄　その古木の不審くまあ
小野の宮まよく八おら
べらしぐ出はもかゆ事
さ後でからまさ世ける所也
ろうけしざまうて
細　伊成卿　かまとうる
秋の庭とそ哀なれまし
てさし家れ久かれと
後給しと此所とみえ
より
さしとまわだ現　細　常生
八やうのようは清のをと
まうずきをとし哀なり
なり
例の虫がもなり　抄　葵上
の方またうりまふと風流
なくに然のわりらんと源

みだれあしくかじらんかじらもなきてちら（孟　源乃）
ぞんしそてよしみ所ぐひさくへし行ゐ（眼おまさへかりのましさを給んとも）
ほどふるようりましてつるまあれゆかん
とかけて袖のさつよりまいりまれじ（細　紫上の方也）
かくしもまつて分ゐかけ給ぬれバ（抄　紫上の方かの方をさし）
そのこなたまてわうきまうべ所でよ
かていさそ御まさまさぐちのるすぎさ（抄　仰せ葵上の源の御よ恋しく）
どをかしくて出ゐけどち給ふとんぶ（源の使ひなかりぬきん給ふまでとしのびやりさ）
そう。年月へてかわへでもえしもき
もそぞゆきらしむるなどこしもの（細　源葵上）
おぼさとくへれめのことゝとりうり
（口結詞之　抄　母せいの御前立便の）
いまりくしてあやけみしばるん例の

の讀し手綱之
ひきやうりそやハ
細云三継世師　学より義
てのこやとわんせんてい
とめひをもせんとても
まくのこゝろをのきて
ゝ夢世とみるより
細云工の取ゆりまいの
おもひをおきまゝや
かわしなしつゝとあるか
さうけくの綱くぬう
のうのおもゆるより
わるまして思いずなら
ずハ何ゆるつとの綱之
しとろりそう
お　実の深切よ綱くを
流のこゝろと哉て
世乃中の　しど
細云業工の字文ハ人目を
えぐらおゆ哉り海
名もなき事を業工ハ哉
しくゆり比綱也

ならハありさ海あまのをしてつなくして
ゆけどりきれかれどもしおりふねをうくせど
ぐらゝしさハよへこゝろかゝるしさことのなき
のづから綱ゆゑ綱ひきやりりそ
やハうねうき世よ人のなきけなき綱ト
心どもれもそんもでしたしうてありさま
えまんでなり世とえうしらんなは忠なき綱
なかとハおまごとふりとづからのあるく
いくど忠わりのふうさ海人のふゝしとなきと
こうそりしらんてはいとどうしうて
りとしら忠かりしつゝまやさうよりして世の事
きうのいろにまよ徳よき
えどりづしをりていどしづれさく綱

あまんしさしてよ　母よれ
くれ祖母よおられ今又源
よ別あふで業をなべ
きんでよろしくまれ
まふとく
ようさまりありてより
まう綱
画　継母のろうくしき
すうかとん乃母又出
ずうなり
杉世よゆうされうゝて
細源の綱く足今業上
とも祖畏し綱わずの
らしと理り綱なり
ぞ今ハひとつぞて
此家ハ源氏の事さまが
ら業をと源川ハいぐ
あれバとく

まざはともひよぶにほうかり綱とぬと人
のこゝろんことをさらげりしく本くそく
れもそまろうそやとこるありしなまて母のれ
ばうさかずの世よにくうありしさいふへのあ
はうしきさあるなゆしやさあんでうるぐるよ
つけておまれ綱人うれとのまひろろ綱さうさ
まろかりそりうら綱みもいうじしうんう
け世ハぶれうらも綱くとどうれなさて綱
まう源又よのりしき人のまゐくげりぞあられ
かうれあわりさ海なりら杉世よゆうされげこ
うて年月をゝハ源海の中みなりゆうへさ
てまうらんで今ハひとしぞてのいとしつき

あさけのうしこまらうたら
へんかうゝるう月日乃
けどさにてんぞ
細 呼二去來説加何一勘幸
說未勘云ハ無桐遠也遠
天意者ハ日月の照鑑
も可恐のよし也
さうべきさてそ
あやまちなきれど先世
のむくひやうらま
とおもへんとなり
さらぬまゝことも
細 又是くりかへり
ていふ詞なり 宗祇
わべきこゝ也
帥ノ宮 細 當無アマの意
之 孟 源 舍弟 帥宮ハ
天暦帝より任せられの
あまく是新王ずて
も任ぜざる官く
三位中将 孟 以中将なり
抄 夏への見く
むらんのたまふそ
河 非論道叙也歟とてら
雖非凶服散班宿老公口
など八皆五十九以上之事 源氏
とせ之支住人也 可有之
之

なからへこそなかりけるやけるよ（め 只云界）
ゆゝひしいおぼしのうる月日の
ますやもとしつゝまる男どもの
つとせうぐうをゐんのうたまはせし
よこらぬことゞもあめれど（一向なるもの）
など人ぐすらし例なさこし（孟 莫也之）
もひこゝま掲らるゝ世（孟 世乃の竊と叢へ竪く）
こゝろもあらんなどおしあ
ろまでよほどのわろう帥宮に（きうのみや）位中将
なとおつしさうひめ給らんとて（源氏之）
しかもとてもつゝ位あさん（くる）
の心もとし中くいつしかへ（もりて平緒と見へ給之）

すはうくて ほどまくぞへ
孟 其之 伶傳上も流浪上も書之
抄 身ハうハ心ざく流落（サスラヘ）
まうとも心ハ此あうり
くるすうべりしらどゝゆう
だ後の新よきまくの
うろんとし
われてもうけざまよ
抄 源のうえた後の新く
くるすれじもあらされど
も新のよるかすハある
おどろくおとあうすゝハ
さうくそもなぐさめて

しらやうれまくるいとめぐらす はぢんさき
おもしそぞらやうじゆよういう まするり
おりやせきつるくげのあわれなうしいとおそ（抄 源のえ由く）
よききよしなれバこゝよあめりそとゝうろへ（孟 源ヵ間之事也）
よきれバ此うげのやうりや尚とそ作ら衣
なりわざうれとのくまへバ女房源をひそ（抄 源のえ之 業あく）
めうきそことゝ世あつる。いとまかりて
（細 源の詞也）身ハうくてきもとくへぬよもうかわち（明 流落もうらし）
まねぐるのきをいとうきん じときあえ
まへで
（孟 業そ事く）まれてもけぐさよも舟のちすらハ後を
そてもなぐさめもしいふとまおすぐそめ

す物をとゝく

花ちるさと 細 古今の哥
之晴日師 宣本花ちる里
とゝよこあひし八十年の
御方にてありければかよ
女御をといふこと

その夜はすこし出る人也けり
抄 葉の又大臣のうちの人也
しらる次の事也 孟 紫
の方よりなるべき物なりと
云ひまうし又とよし
て侍りまうし師 紫の
かはりとさらのさまて
んすかゝりてたぶるよ
花ちるへかゝりてゆく夜更

抄 寝殿のわたりの程なる
つらくれはぬくくれて、すこしとまどひて
つまるさ御、花こらうなるよさぶひ
あまりなりと思ふかたの人の御あはれさ
孟 御ありさま
御ありさまはわすれなかりけり。物ごとに
うしきてくるしほどよくもりのあ。花ちる
細 花ちる里の
里のうろぼそげにおはして。つねよりこと
抄 細 しるしのみ
なにごとにもおはしましてのへもいまはひとさ
びしげなるつきやうしと思ひらば。そ
の夜もきこし出給ひしいとりのうくて
二条院
いつかうつしてもよれど。女御の
すまゐ見て立もせまほしくる
孟 御殿
ひさしき給ひ御心つゞけんなる。

いといとゞしき心ばへさはありきし御、くど
源氏の
このほどよくくれてもぐひまする事月
抄 花散里
の御有様もおり
いとしわれ去り給ひぬ御心ばかりやられて殿の
御いとゞもなかり。月おぼろよきにいぞ池
あろく山こゑにまりもありさけよき
あふみとすゝきあれこん岩根のかほ
細 花ちるさとの事也
はしやうさみしきすゞきてよへうしをかる
給ひずやとぶらくしきぶりなる
あはれそへてる月のかげの。たゞ御めしうら
源の
めやるかたなきこゝちしてまゐるかた
孟
花ちるさと
ひまなりのみてゝいとあやうまりも
細
花散里の御こと
あび
はとしぬざりなどやうく月とて

中 孟 いかなる人にて有けん
もとにいづれの
本よりあらん世の中
このことにこそ人
ありての事は只今ほど
あれん人のすつのほひや
らぬくうしいらの中
なほさしそはし。
入道のことをいひて
うこしもうきり
おもてのかくしもとは
人人見を早下し すえ
なり

てゝうし　孟 晏子昇紀
同 枕草の文に秋花と文
よことりしくちなし
わしめや　細 みじか夜こそ
ありし時何とて過ぐるかと
らなからしぞと後悔之
川方よりかさなる
たてこそ
お和よりてこそ見るよ
て世よりてしんもとも
なべし又世の字にそも
御心へし
きへの月乃　細 死の後中
細云の心はおきて時
のうすと引て只月の入
方と云心はそむきえん
給く例のしい海泉の心
暁孟 御何も同お
めてして　細 わひをめて
やそ比の衣袖にやどる月
えぬかしとおもひけ　師 げば
と八年方とうけてとて
月かげのやどれる袖

おはして又ここにも御物語の程に明がたちか
うなりにけりみじか夜のほどや。かばかり　細 源の詞也　孟句
の對面も又はえしもやと思ふこそこと
なしにて過しつる年ごろもくやしう。　孟句
こしかたゆくさきのためしになりぬべき身　孟 罪なくてながさるゝ事にかへて
にて何となく心のどまる世なくこそ
ありけれとすぎにしかたのことものたまひて。
とりもしばしばなけば世につゝみていそぎ
出給ふ。例の月の入はつるほどよそへられて
あはれなり。女君のこき御ぞにうつりてげに　細 こゝろは袖ばかり也
ぬるゝかほなれば
花散里 御月を袖にとゞめたし
月かげのやどれる袖はせばくともとめて

てらしさる海にうつして
えうけり只今の對の名残
侍らぬくさてみえもけれど後
もわが身のみぬ身にも此
源の御心へハよくわくべき
てもみるさ也そのつるの
女のこゝろ御にハうれしき晩日
のどこ　細 半の心に此別世
とさすしおもひそすさまじき
れハ歎也　細 女君となく
涙かくり
さめさるとやかてさら
えてくべきのうち也　對月明
莫思往事　師 源氏の心
しきおもへさかへては
めぐく女君のなげきを
なれハいたくなる也
きたもしぬ洞の
細 行さきをたゞぬ洞の
るかしらハ只めのまへによ春
月かげそとおもへるも流されぬべき
さとえしぬ徒ら只今は
きこしもてみりへいへる

もみばやあかぬひかりをいみじとおぼいたる
が心ぐるしければかつはなぐさめ聞え給　孟 源氏御歌
ゆきめぐりつひにすむべき月かげの
しばしくもらむ空なながめそおもへばはかなし　須磨の暫くの事也
や。たゞしらぬ涙のみこそ心をくらすもの
なれなどのたまひて。あけぐれのほどに出給ぬ。よ　孟 夜の明る前ハくらき也
ろづの事どもしたゝめさせ給。したしうつ　孟 源の人々の内にも又わけて作へきしたしき
かうまつり世になびかぬかぎりの人々。とのゝ　太政大臣も其れ也源にしたがふ人々
事とりおこなふべきかみしもさだめをかせ　孟 二条院
給。御ともにしたひきこゆるかぎりは又えり
出給へり。かの山里の御すみかのぐは　須磨之
えさらずとりつかひ給べき物どもことさら

こゝろまかせにするや
文集　細 白楽天が文集也
花白楽天の詩賦をあつめたる七十二巻也 長慶
集といへり 長慶は年号也 抄 昔
は唐人の詩集が多く
もてはやしゝぞか
は後代にあまたく多く
琴ひく河も
白氏文集草堂記に漆琴一張とある也 河南
巻々　細 巻々は文籍の
抄也 師 紹領のまつごの
かんそせ 抄 桐帝などよ
みて紛しまる所の巻
々なるべし
文集言を 孟 集の部分が
紹えを一部抄えてあつ
なり

中務中将　細 当源のうつひ
給人也 三条院よ源の従兄
の人也 抄 堂の人とは名
別也
これすなはちそのうつ
は中務中将当源の姫人
なれば也

まゝにひゞきてすまひさへ 孟 省略之
さかゆども文集などいひしことぞ
て琴ひく河ぞあはれ紹前をたゞされてう
ど花やかなりけるにひとしくいふのぐ紹
をはかやしの山の河かぜそはそいなゞさ
かりなんどしわ[illegible]の河のこしこゝ
なみのこといりうてもしのわゝや 細 紹上之 孟 領ゝ紹
うじ給ひしやう 御左流粉之 細 当無ども
さるべきさまどの巻々なれまりてあり 孟 当紹紹一部之
とふ紹されまうのこふしまち代々あ 抄 源の流之
どのなどいふてまりてが綱をなかゝく
しるしとよふにしまんいたしさ家

司けらしておもふめすくきさもとのの紹 是ゝらへての人
ひあげくうけさの中務中将たゞ 孟 抄 堂人俳なり
のかたうれなされりてすうなしとて
ほりる紹とぞうつまれよるなゞよは 紹 素をくるれうひを八紹
けてしぞにいのちありてこの世よ 細 源の泪之
みんるやゝとあらんを給つけんと思ひん
人ぞこゝなる人ゝとのものくりし 細 この当人の也
をこゝのかうとうそのてさんよる物ども 作 所えならである
られくてふにりかの人は風のもて 細 宰相なる
らんとるる墨などもをかしくさ海の 抄 風流なる
いそのふくかくさつくらよあ 仰 かたくと
しのねこしるし内侍のつきぬれり 孟 それり殿月梅の 抄 殿へ源の

あはせ鏡とは　細　二条良基公
ちりのみつよ後ちる月を　雅章
あり花の葉の光に光る
絵の文を似りき出る御
との絵しもやうの画也
ドて八宗のあらす事も皆
思ふ物の如きれど心ひく
もみ心ゆくぞらむの事也
されバあはせけりとハと
こゝろ也月光て物のある
也山家後成卿の女八代集
諸の中第一の句とも
られしとりん　孟　そのある
のつれすふましきせバ涸の
とかうの文むとよめるは
無実後申すよつひるし
あやるハ興人々河水尾　西涼
と思ふ人いづのまはんてその
れぐつ絵うる　暁　くれるも
あせの罪まそぞおるらん也
バのつれぐてなきのへ　師代
勝月に絵ぞりし根とき
あらん花勝ともひきふ人

ちりそくちてきえて絵とかせ絵をねを　細文ノ何之
こゝろよみひまへなくし今こそ世のあふ　細勝月歌むちて根ニ何之
あまたる絵のかさもへしらきしてひる
きこしみくてそ物されと
あはをなきなきのゆよき何うしや　保元
みずらされのかしめぬりんどいますへいつの　芽しらかをよまつ
そなんつとのかれぐて物けり道の風とも　源の用ての大ちり
あやうくれバ海りよいきてて絵をず女い　海勝の
そひよれなき（く）といふどうにかしまそてとのひきへと作袖
もりかつも雨そくなん
　孟勝月を心人
あときいう何そうみえなくも消ぬべしまされ
てばの絵ともなくむぞてすくしよかれう

辻の罪ハこのしとひるがしも一事ハとりハ遠のやけのつとのかれぐてくとかのめくしるは
そなよ居のかとも危うれバ細よハ堂しあゝれともり
源川　細とるき水佛也　孟　勝月ゑぶくまるくもとうぬべしとハ分も消らしのんぞり
なられく绫のせくハるりしへてのはのあはせくお源の中京とも物つけど我分も
水泡のごとくやうてそひよ消ぬべしとへ

あはそとそのくれり
　細　くおもれどもくこの
　筆　此君のわん
さゝ山へ　細　何ものの不しも
みつどの山ハ宗注死宗
陵に　暁　業花物語ヲ宗
陸ハ和の塚の奥也天暦
治しそ不よ御廟のこ
とゝそかくのへともと思
て書きしぬ　明　れの勘
同物語第九寛治八六元

きまつるれてゆくおぼしけすりかまひとそび　世色しちり　源の人文
さへめくてやしきそしてハだ袖そぢかし　去列人と見て　よろ個之
くれども出りくしてうしと出りまんゆくら　細　大臣の方さまはむれたる也
出かくて出ろけるすずるもへバひとあか　野為の
ぐらかも学し語のずなりぬ。おすとその　漢字ハ
営みハ涙のはそろかくとまそまかの絵とそ
さゝ山へかゝりで絵。曉りけて月出の近き　孟君のすく
バまづ川へ道のかやよあかりて絵ちりきとえす
のまんよおかまりてはのめつきしとくて

二一条院崩御葬送七月八日也八日のゆふべ果給ひて所へおさめまゐらするとぞ
かかるさうけく月いつかはと　花　定家卿ことをとりて　春（内大臣家百首）八日なるむすぶの山のはに暁
けそ月出かくころ　細　定家卿の寄をその真下の句を用ひたる也或ハ前の句名残おもかげ先々
やさしの御ことうり思ひてあつかひ真実て小山へまいりたりかんとく
冷家　孟　冷泉院也

をかしうめでたき
孟　萩つかさの御を縁と縁
御しのぶかく

せつなくえへあつかる
お着つかへ定通あるて
冷のまれきのしもしく

させ給ふ家の御しき給ひまいしくうしろ
めたき御よせひ出で給ひ（孟 源之）さえていかうき
どうの御物語などしてうつりの衣被さより
なんりしなかうしめでたきけしきひの
ひかしよろこぼしうつりしれんやぐへを
うとめそこしませまかりてれど（孟 源氏を見ひて）いまゐらす
（とをり）よそそもとおほかたくし（源氏之）いかれうてみを
ゆくいまひとたびえぞれまさりめてたれ
御んじく人して（細 源の御）うらみけりけぬつきよ
かぎりさぐるも御心のままにまかせあはせたまふこの

おもしろしや　孟　山陵へ御
思給おれとおもへりきゆて
御り
よくよ物と　御　夕霧の
むせうりよまるよ病く
うしハあくわかハかりき
細　萩つきの御寄一の句ハ古
流二の句へ源之御世を
失ひされとも思ひも
おもかげうつりへ連めぐさ
ししとし　同　あかハおくれさ
いかぞそよ世の中とおもれ
つきの日まで　寄

かくまかん家中そこうち御つかしげるかき
身はつきよゐしても（細 夕霧のけしき）家の御世ならぬこころ
くみとうしきつとのにあし給ひそ（孟 源之）とつり
思ひや（細 これは夕霧也）家とこち思ひおもふうつりそとしかし
われはれんのとうとろと思しやりて給ひ
ど（源氏之）あぬしむかのとこうちあのかわり
つきとぶさ給へるそらいてそうつきを待
なくめきうきすら（細 山陵にまゐる）山よありの給ひとおほれて
御てやしたらして給ふまとみよ物とそうて給
つるそうれなるしゃうひ給れそしききかり
うしはなくあかれしら世のそうて世そむ
きくひもなくくそれうつしきれんなまど

ふんまうらひとゝよ
蒼蓋と源氏の法名を
いと其まゝにぞあり

まくらなりしかれど
おもひこともあらそしく
ゆるし給ひける名
どしいふべく
左近のぞうの蔵人 細 中将
紀伝ある伊也 保孝ある子之
らぺきからかり 細 源の家
人なるよしりてこそ おなじ六位
蔵人四人の内第一を極臈
といふぞれが毎年の叙位
に一人づゝ叙爵あると巡
爵といふ

ひとゝもにわかれしかのひかこそあくまじくえぞつ
ぼけしせしうまもぬ
孟 源氏 桐壺のまき
別しよりあきことはつらきものを
孟 此度のかうめのうち
ぞ此世のうきはかきれり 細 暁つけて月あかるき
まよ 龍 にとゞまりて六人ぞかり
色むろましきかぐらりあそびにてぞれ
あすかさうらことなれどもさし世にほ
わりきよことなりこられいとあうしき
孟 弘徽殿女御の見るゝ
中よりのちそさむ目かりのとぞいよんま
ていうまゝ罷りし左近のぞうの蔵人の
孟 叙爵
つきうかりを獲すぎうつ後つかまう
孟 除籍 官を解かるゝ
じらげづられてつきこしらされて

籍とらふ籍ハらぢさる叙
上人ハ四位五位六位と昇
殿をゆるされたる人を日給の
簡とふ札に出仕のかたを
孟 叙爵をしたる源除名
ま依て結句とゞまることとけ
づられたり
みちひ出られて 右近の
ぞうの法務のうち出せ
てあそして源の内のロ
ハつきてうきうちして
うられて 細 弁もうふめ
しきちく 師 せんへつし
とへるの世をおりへぞとるる
世になあひめらる弁もう
さとりや孟をのつとを
そて弁をりうぜなり
けんいつてあるよんん
孟 うりの玩弄にて今より
勝てありしをとひあるをも
うき世をへは 斯 をそ
見と船をとるなれども
どきうんあと明るよ也
まへと弁の法名にあせらり

それはとめふせのうらなりけるとの志
下略 此段の紀
あのこやしみ後つれども わかれしえやうしるまで
あかひ出られてはかりて此ほん馬のならそ
やら
孟 右近将監 右近
ゆきつれて葵かざしきのをとをえは
つくしるとのきりがきさとうふとげよいと
孟 源氏 心
おかりんへりけるらふやうるり
りのあとみほとも心ぐ僧し志もは
馬よりおりてはやあうのことおづと
肉 三月三日 辞見 日本紀 いとまもうし
経よそ弁よありけり志あるふ
孟 源氏
うき世をへはまそもろすとくまうん
名とべるとの弁よあらむせてとのあふ衣

猶めでたうらき人
孟右近の君さくは源の
御前と感じらる
おほしまし候ありさ海
孟御後は御庭の附と眼
あのやうにとおもひつ
らきりなさまても
十善の帝王とも乃
心なり
よろ川のことをつくり
また
お源の御そうのあまそのま
かゝり師もより帝王も
崩後へにおしき故をなし
こゝとろどあらうに
法華より何の法花
もあくれても
御くなるは みちの事
細 古墳何世人不識姓
　与名化作路傍土年々
　春草生 白楽天
かゝくれるんらひて給
御しとも

猶めでたうらき人にそて身にこそ家
よめでたしとうちそてまつり出山まてで
またおほしましれわり海さてめれまへ
のやうにはかりしつゝきりなとこそらも
せよなくぬかる人ぞいとんとうすくられ
しきわざなりけりよろ川のくしとなく
くやまでもよころうどあくもれえ
うけきまつりありさてさいうの聖母しの
海をそしき海くのれゆいそんえいつらん　お源の心と
うさしらせよけんとうみひなしれとは
道の果まはげくなりて今つらは得しばど
参りさま月も曇がくれて森の木ぶら

かゝりけりや　細 おもき月
の雲がくれもしとみて
古院のかゝ給ふと御後
ぞうしや月の雲がくれ
みとんのおもひ思ふとあ
給も御蓋の意趣のま
とおもふなるべし　拾円
孟桐壺のことを月に
比してかれがくれる也
表面にも流せうそこ
お源より役へも流せうそ
と申し給ふのうらなれば源
の果まかりへ参りぬて
王命婦と御かつりは
細 御蓋の御かつりは
八才を人々りとそ表裏の
その給へ世孟入る表の
御かつりは表裏へ参りる
又まうり候しれ　お今は
すびき表へまうしぬる事の
御おり地わきとも
いかゝ又表のことの
細 表をさして　拾 表裏
常花の表よりあひ家

うつくしきはしうり出むりとられさ
れらして妙にとのよあやしれ塔のりけさ　細 おのこくせ
やまとしまつるそこもちさ御なり　細 漸くロサム をかしとおもはん
源
なきうけやいてころもんしゆへつなが
けり月をくもがくれかるおけらつ猶まり
ろうりまうて花がみさかも流せうそことさ
給王命婦とれうくりとそさぶらひせめ　お源より王命婦へ[illegible]
へぞのつかのよしそてふるん前くなれ候ふ
又まうり物しれぬかかるんわれさのされ
へはまうりて云ふ海へしれ給ふところ河　孟 表へ物申と聞まうしと見え
とうらりてけいしよん
源氏
いつかま花の露乃苑をとらんときこなど

らんとハ秋ハ時うしなふ
みかゞそとく師もまさ山
里にかりうひまろ也よ
山織と云こと見り 細 数遠之
猿のちりもとき
孟遠之三月の末又ハ原の
名よわそしく
くうんと 抄 五令嬢の冷
ドませ給る

わかきあきこともり
抄 是より令嬢の心中也
君臺と源の君ゆるきを
ほのくよ思ひてくるゝ
花ひらのくて のまき
きよにすくて君つける
源も思わきうらわる御
きそとく

ちん家山がはゞて、桜のちりちりとくゝ
桜よつけのつりうくなんとけらんせき
されバ帰るさこれ心から見もすかめぶちて
おつきれ、れせいうじものし給らんとけば
とれハさうしうぬじすよ恋しさものゝとと
くらまして いつよとびへうしとのゝ
のそかれのけうつりやとし表に
つうわらきせきことよけ心もとんてすめ
のひし昔のことおりくのけきさ海らひ
でけうしにと猶せひすくてあれも人
ともそぐしあるべうりけり世代心と覚え
けさりとらやしうへ代心細川

御返ハまうしにおもしろせ
細 花より五令嬢の文の詞
く卿らく申上べきこと
ともしとなり
うきそとく 細 花の面影
と源の粟摩よりしてふ
ハくろん言を浴すゆとせ
卿ハ妻とハ三月の末ハ
三ハならりとの別ハせん
このしたやらでてまつ言よ立
陽給へと給ひきらく
時しあうぞ 細 川る未見
心明くけわしがたうて給
了給へきの心く

らんしよのやうかぞ場が御られ夜
よはのくしらせやるかな侍られバおまへよしけい
しはぬ心得そけるよ場わしめしうれ詞
気もいうじうらんとそこつとかしらる
のうる後けるなさん
まぬぎてとゝしらるへうつくれと川きは花の
物とまらつりそよとそうしわららくとさ
とて、弟嬢も表わりう猶ゞうりとり川く
ひとくめのうら恐びてるさあてりひとめ
もきうそすんわらん人いりく故帰しも川しと
きめられあいきあ母とたりけさおしこうこ
えね人すしましてつねはまてりうすれさら

抄ふたみハやすと 細 みやしき
りぬやうどのとの字和
抄 不讃ゆやらやうまむ
へしと也 孟 下女やし
と物すぞ 源の御下向と
説くく河 抄とあ 雲お
またせとあり 水原抄
云ふとめとハ曹司ると
御所とハひき面のこと
仙源云記源みどふ
も長女御厠人など書
て倫める景記え おれ
只おやしき女づるみどの
ることさてしより
細 この世の人より
細 此除名のうち絵とくんて
こんどのうし
こんじらめ年貴ろて
おいづれも官位なるのす
りつけて執奏をれ
となるべし

しえさぶらひ給ひけるまじきことゝもあまた
えやうじどまでもおりがたきはうりこ
のあさこなりつる代おぼしてもろそま
つるね鶏やへんとかひるげさうみや
ことの世乃ひともとにらしうまくさひさ
こしんすく川よなり給しくこのことみ
どのけまんよしうむろさかくひまてぞう
し給とのすらぬてなうしうぐとのけ
いさろりにしらぬんおくれとくどうわ
こんねやハおりしやんとなさうんさう
めい年衰なしの中にも世目うつされより
なりはうとおもしれおるしぬふハあしねど

さしあたりては弘徽殿もやさき世残おぼえぐう
まゐくまつりける人まみし世ゆるしてた
しもさてしおさまは世母やけとそしつて
うらさなれど身ともそくふかくひきい
らんみもなるのかひさしく世ふりやうら
ありハ人をらくゝしめしさ人おほく世中
いあらさかさ物ゝなとのそまろ川まつは
て世けをきを日ハ去ぬよ御抱绪のどりこの
ここしくろしみて例の衆ふりく出給
りのおぞたえて、ふびのおしそをひいつく
やはしまて月出よなりなむ絵をそうい
でくさつまをくりまへうしいすよさて面へ

あ絵もさしえくうまさとまう
まへうしつるよ
孟 僕人源の御免しを
これらしとしをさらんとう
八重いまん物を角にて
人物名しともひまかすす
のさわらんとく

いうおりは
細 世のおもひと 御人君
さハ人めきろきまめ
こころまり

物わびしく入らりいとくしかる
へられそ
孟 源の思しくやすくも思
かは哀をそへしるは孫云
よみかはれしさんと思給
のかくいはる世の命は此の詞
よおもさるらんとおもてなし
しうへばあはり此詞なそ
らくをうてしかり
いきたるの別としそ
おし生別のありさまとも

きこし御わかれのほどにかくぞとおぼしめし
と思ふらん一日二日にたまさかにへだつる折
だにあやしういぶせき心ちするものをとて
えす申さるゝあけていくのすゑにいかなるべき
多くは女君ふたつみならずなげきおぼしてね
さりいづくまでも月ごろはいかでかおもしげによ
てぬまでもわびしくてさるまじき世とよ
れまかいはるゝに御よにさせらぬ人絶つん
とくしろめさくされしなれど物わびしい
思ふらんいとくおもふへきなれば
いける世のわかれをしらでちぎりつゝ
いのちを人にかぎりけるかなはかなしなど

なかへくるまさるかなと
かかり
あさえなよはしるすゝしかへ
かくしきの色とはせたまふ
うくみしにそはなくなる
かりそをとまる事なとえ
けしくぬいのちょうとへて
抄 源の書ま命をまきり
てしきりまたへばしそ紫
の命も物すれ々にはな
しせりしの別あれは紫
の命ははしくぬえそ此道
る命に眼前の源氏の別
をかなしとも推量せや
としくにそそ気なる
うるべきかや
河 舟よのりかね 細 流川
よりなるべし 哢 孟曰
日 舟がさは 細 船の早速
なかご文字よらすく
ハやくに奉る書の道
そさるの附づりに
晴 一日よ須浦よ下の息の
ふ不審くと從され

あさましきよそふしきかへど
紫上 細 女君の歌
おしからぬ命にかへてめのまへの別れ
をしばしとゞめてしかなげにさぞ思さる
らんといとみすてがたけれどあけはてな
ばはしたなかるべきによりいそぎ出給ひ
ぬ道すがら面かげにつとそひてむねも
ふさがりながら御舟にのりぬ日ながき
ころなればおひ風さへそひてまだ申の時
ばかりにかの浦につき給ぬかりそめ
の道にもかゝる旅をならひ給はぬこゝち
に心ぼそさもおかしさもめづらかな
り大江殿といひける所はいたくあれ

をやたやうにまゐりぬ　まく　仰　但日みがきはなれハ返風さそひてとあれハさも
あらん一先下志のかすとて　みたまくらのかけとこそ　雨白し
ねかえどの　細　斎宮律師の内乃旅館にて　それは松たりのよるとこうにてや　其日
て新たに入まふ所とく一代一度斎宮の精鍛なれハあまたこゝのみたまかなしく有
河後拾遺集良暹法師ゝまゐりてこのみのみかえの居まゐりて　あるよさかりといふ山
ゐとあり此所た従松がうりそまつりし城のとりつける有古斎宮　一院て海道の標乃岳に楼
をとゐ所あり昔此所に驛樓を立ゝく　私　斎王律京の旧伊勢を参りてこゝ和
絵とへゝく像の家にみりむかそて難波まてたゝへ来りて七日まてえ江の仮所にまゐりて
ま乃へ来し給ゝ所にまた旧殿ハ秋まて御鎮の内乃精鍛とゝれハ松がうりもそ一にのこれる也

うかたもよ名と　洒　楚屈原
うみかされるうししるすと
いふ成、楚辞曰屈原既放、身遊江潭、行吟沢畔、顔色憔悴、杜詩註曰屈原有宅在秭帰、後漢書郡國志注曰荊州記秭帰県北百六十里有屈平故宅、方七項、累石為屋基、今地名楽平里宅西記之　知　河海
屈原をひろり一人まゐりて
へしこゝろえ　花　暁日

こゝ身の上をうらみのみて
ここ山登りし　細　つゝしもちくこゝり
ならもさへ一むかるうき世のかなまされと
頂勝あるとも　唖　伊勢物語のやうじゃうべし　業平絲行の内乃旅の中にも此書
表をよくひなきそりかれどかうこうと以ふことにて傍成の此トにまつるハ又頼勝也と

三千里のよ　細　けふ人への旅
八三十里外かれと三千
里の外のるかるまかとく
表わうさ揃之　三千里外
通州　李十九年前任輔
蓬　在呂跳蘋武　十一月中長至夜三千里外遠行人　白氏文集
よる里を　仰　けふのかくるかる
うハかえくとうろよ八御
もへそてゑ叔れど此所かし
雲るゝみとてもみちのふ
をへなそてろうまつゑ
つてうらぬ細をのく　細　おき
のへまいの山の鹿子との命
んれかる物もつきさりし也
羈旅の感慨みとりの
壺石にゐよつけく深のゑ

[illegible]

秋[illegible]はつくれバ何かよりもつくれバ[illegible]
行平中納言の　河古今田村の御時にことにあたりて津の国のすまといふ所にこもり侍りける
宮の内に侍りける人につかはしける　わくらはにとふ人あらばすまのうらにもしほたれつゝわぶとこたへよ
[illegible]
[illegible]
暁[illegible]にりしよりうる
かの[illegible]
[illegible]　細月
[illegible]
細　[illegible]の月を
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
もとく
入さうのつかさ
細　家領の者なるべし
河　[illegible]の法領
[illegible]
[illegible]
いとま[illegible]ありて
河　[illegible]の人[illegible]
[illegible]にあるべし

よりはじめてめづらかに見給ふ。
ども、あしふけるらうめくやなど、をかしうし
つらひなしたり。所につけたる御すまひ、やう
かはりて、かゝるをりならずは、をかし
うもありなましと、むかしの御心のすさび
おぼし出づ。ちかき所々の御さうのつかさ
めして、さるべき事どもなど、よしきよの
あそん、したしきけいしにて、おほせおこなふ
もあはれなり。時のまに、いとみどころありて
しなさせ給ふ。水ふかうやりなし、うへ木

どもなどして、今はとしづまり給ふ心
ち、うつゝならず。国のかみもしたしきとの
人なれば、しのびて心よせつかうま
つる。かゝる旅所ともなう、人さはがし
けれども、はかばかしう物をものたまひあは
すべき人しなければ、しらぬ国のこゝちして
いとむもれいたく、いかで年月をすぐさ
ましとおぼしやらる。やうやうことしづまり
ゆくに、ながあめのころになりて、京のこと
もおぼしやらるゝに、恋しき人おほく
女君のおぼしたりしさま、春宮の御こと
わか君の何心もなくまぎれ給ひしなど

ひとりねかく
[illegible]
中[illegible]
[illegible]
いそぎ[illegible]
し
[illegible]の人もなかれば
[illegible]
ぞとく

二条院へもたてまつれ給ふと
入道の宮とは 孟 紫へと
藤つぼへは[illegible]
まやうく花鳥に紫への
御文は書やりにのせずゆ
へあらまほしや但紫の返事
は下にみえたりと云々
松島の 細 式部大輔長寿の歌
[illegible]
のいそにあさりせし
くしきあまの[illegible]
[illegible]
おかせ[illegible]
[illegible]
の比なれば華紀なども
さかそ[illegible]
こゝろ[illegible]
此註あまりあらはにや
みぎは[illegible]
細 [illegible] 文の詞也 武蔵
[illegible]
き[illegible]

とりめくらしこゝろもひやつましくなん。
京へ人出したて給ふ。二条院へたてまつれ
給ふと入道の宮のとにはかきもやり給はず
くらされ給へり。こゝや宮に
源云
松しまのあまのとまやもいかならん
すまの浦人しほたるゝころ いつとはへらぬ
なかにもこしかたゆくさきかきくらしみ
ぎはまさりてなん。内侍のかんのとにれい
の中納言の君のわたくしごとにての
やうにて中なるにつれ〴〵と過にしかた
の思ひ給へいでらるゝにつけても
源
こりずまのうらのみるめのゆかしきを しほ

のうへ[illegible] 細 源の方[illegible]
[illegible]
中納言の君への文なれば[illegible]
より師殿の方への文なり也 孟[illegible]
[illegible] 細 殿住のた
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
業の[illegible]
[illegible]

やくあまやいかゞおもはん。さま〴〵かきつくし
給ふことの葉おもひやるべし。大殿にも
宰相のめのとにもつかうまつるべきことなど
かきつかはす。京にはこの御文ところ〴〵に
見給ひつゝ御心みだれ給ふ人〴〵のみおほ
かり。二条院の君はそのまゝにおきも
あがり給はずつきせぬさまにおぼしこがるれば
さぶらふ人〴〵もなぐさめわびつゝ心ぼそう
おもひあへり[illegible]

さゝまは　細 紫上のはゝ
とをくさめんの事う、
又源の屏衆をいふ、
へだてしなり

ふりの陰うそし　細 手向
世に今源氏に御あれども
さらなる御からりそう
といふより明鏡 拾詞の字也
時平鋪の直衣也直衣指
貫の袴のことなり夏秋に
直衣年齢によりて侍
色あさきこと、老ハ白き
なり指貫も年により

しまひしほどに、めぐりきてすつるほどの心
おもひなげきにつけても、いまいと世(世には)なく
なりさらん人のやうにのこゝろがりしられ
ば、(おか納言之)少納言は、備後(細 松山僧都之)にはい
のりれてしわたしこそも、二ところにこずか
うれしき世給、(仲 僧都のいのりまかぬに)少納言もかくもうげく
(紫のうへ)れんどち少納言はめずらしきなり、又りくのつゞく(源のこゝろ)
ようをもかくべきさ油よわたしかくくとも
まよいのりや給、(紫上より源へまいらせらるゝ)よびのはらやね指る
どてうしそすりまふうどりのはなると
(河 繰 直衣)(直衣指貫の事からるゝように紫の思ひつく)さしぬきさ指かくらしなからもおい
(細 まへ人にまかし源の前ねるなし)(かはをそし)うぐしろうねうこ給し濃きとの給し雨うげのげ

げにみにそひまつるも
げにといふ詞にとつゞけも
お源のさらぬ後の親は
あれどとのそのひし御
後は親のことなり
あらぬとおもひて別ても
親ぞよとあらぬあすぐだ
とあるあしすひしされ
ども手 伊ハ源のこと給
ひしことまた更に身よ
立そひてあるれぬさ
まあかしく源のおもせね
たゞうひのつとく
りぬまひしまさ拾
御れきもこうさて八ゝよ
さるのまさ拾そえむつ
細 まへのありて源し也ひ
しはてくどせ、ひさるる
しうひし琴、めさ指
まるほどとありし詞に
かけてとつゞく
ひとしくせるなく
〔?〕別のことは
細 死別

よ身にそひたてまつるも、(源氏のこと)出立のひ
しくさ(くら)ゐもねをしかまし、植ゐる御給
おもひのこゝろすぐしてうりのひをとゞめ
思ひめぐらし、世にもわびぬる(細 紫上のまゝ世はあるまゝぬれしかひとり)ひの
人ぞおもりすてすれむつびゆくら(孟 源の父母の)
(世にて別むつびあふを紫の思ひ)はるかなりけりあつひゆくも(孟 先立しさき)
あうけまつれば、儀によるさこまれて
うちひゆしまつるこどりたらびさそ
らせるあすく給ふるんていうじうきすくてい
(死別は一向に思入ことなどさへうちに思そ)めひなきこそもやうりくるしそれ給ももお
(さるもあらんとく)ひやうらんぞくねどいらうられど、ゆくまで
と恨あるは別にもあへぬを拙ゆるに。

れいのきこえしかなり
ふかく御ハ近なれど
給期なきなりしと
いかゞでとくちなりあり
入道のこゝやみも 孟云より
我つみの浜らく於吟の浜
脱天と源ども上ひそふなるよ
我つみのゆかりあなく

ものてこまさくあるよのつまり
箋浜人我つみの浜ゐなりて
さよりなるてハあなれども
世を深あへしと

かゝるよき世の
細源の蓋通のうちとハ世
をいひおりむしかさく
人ごとハ人言也 孟これ祖
ま河ごとぐるいらんと
半の人の口あれど我と源

細 状津の国の浜たなどいふえ兵うら出生は八祖ちうきこ五きれどゆう
花 別くハいかあひまんとおいふん限ある世のいのちとも 伊
つきそりん入道のまめよも去ぞあのはし
とよりかゝおかしかけく海いとさうろ
箋我つみの仁とは源と蓋通のうちへ
里浜もくとのゆ祖とやかりをみはいゞあさ
くハゆかされん。細 蓋雲の浜んゆうち 年ごろいふづくりのくさこ
えあどの川くおりしふもとうしすきけある
かしきこそはそれようけて人のとゞめ出
ありととしてそのまゝ気く人はゆがりあび
川く義とも地頃うゆらんどもそぐし 弄 河 徒
くしうるてかし給ひしとぞうらにくき
白とうるへし
世のひとしこうれとうけても此うこはいひ

源のよし思ひのれらく
やこめかうけりの 細とぞ
のとよふそてまことらうへし
また思よいひのそくり
おいひ出ゆくかまるてやらん
めかうりの人乃浜ゆむ
けりしつぎそよまろでわ
あかりありし心のひくさ
よすくをもぞしえろへし
我ハ句編也ら堪思とし
が源もといひゆめか切ごの
我くれんのひくゝさふま
つせどもいひあって人のい
ひ出かくなりてやうね
るへ表将のふむけらん
しゆる致てし 師 西院平
意ハ出すし状はや於の我
湖きう
ふ新は意しらも 細 業子地は
こゝいうこし今や むかなま
薦雲も源を我は出ぞを
へこしえ
塩よかしるとやくうてそ
花 塩やくを役の家まそり

出かうしあくてうやこめかうちの人のれ 細 人とハ源乃
ふつひとよう 時月
とすむけをもあるががらあかりしきのひく
うこまりを心うら川いめやもえくわるそうし 細 源ともく思ひまひ かうこしとえ
川るぞうしと義よ取しうをいうがやかり お
ざうらんはのりるとしそこあわやうそこ
細 文の後之 孟 所へかけてこゝへし
のころもいらじ
箋云
塩やくこの紙やくてそ松嶋よ平し物
あおまもおなげきをごつひらんの本れぐの
孟 勝月
あのゆは
勝云
師説数多之
こうにさくあまのごとよつらむ名なれど
ゆうちつのよりしてそあきいらしおなうこと
どもいえかんとどうゆくしつきてし中納言

すへて細くながきハ志か本よ見えたり 細 秋やくと秋多の後よ寄せたり 河 後拾遺
秋までの命をたのまぬ云の萩の花のうへとやくしやくば 暁
海よまくあまのまま 釜ぐるよ数多よ面従之
くし海人ハ海よ比をるく 抄 海人と海よ比しうるよりも世々のつねの海よあたりて勝
よハうくけつり 師 元らの海ハ釜ぐるとよむ又一海よ海よくおかしとハびうけ
数多よ清くむなり。細を彼源の鮒よあやかやいかぢよらんとあかりよ芸て勝
の原と言ひるハ弘徽殿太后藤家数多の人ぐよ包む言ひてあれべくの中よのこ
みり候て占ひやくんうるとあまぞとのみく彼源のうさ哀やくおまハむりひを
さしていふとうくよぐる比勢よて源よ比さんるゆめむとうくり
さくらわるけとも云えあん 細 これまで文の通く 抄 源の譜君乃哀なるをいい
ふもこしおくらしるれハ中のでむとしハ蓑衣
中納言の君此中よあり 勝の色ろうを中納言の色もう此中よすうるとも
姫君の此ふを 細 ふよに 中納言色ろうに勝の殺を思ふう
こまうたらう此色なれぞ の君乃ねらうよまさ 勝のうけくさ海ねたし
とおりまそ源より文 いそぐくひひさう。哀と占ひさくて給ふ
あわよしハみてくり幸 源の心之
とびさゆん此物語よの あぐくとあれバうるげられもね 暁君
せさうるを 暁 二条の君 の君
への文乃詞なりよなし のはふをはふことよてまやうるすりし 此う
ううくんの 抄 怪うむ袖よ つうれバおくれたうこしより
すも波路へぶうり衣よ 紫言 海人の志月らび袖よくくんとよ
れぬれまそくく 暁 よう
の衣ととりかつのんよ

ふせぬもわりべくし 細 紫式
上總のるまくく又ハ只と ぢへぶうり海のうろうよふかりのいうし 細 うくし絵衣絵をいり
との弁抄ぎるぐし絵 まつるさ海みどいとこをうかう。何るり
ふせをもトんありべし とらりくきうりのし絵をおふさ海よ
何うもらりくだう て今いしまよこうろあはくしうゆる
細 紫上を可なん人とかを うづくふかまれくおめやうぬそおりべく 孟 論子室ハうよ行をなさ
へ孟らくトうハ上臈 抄 もとし後悔し 抄とし抄わしよいとうくらりよ
しこく すみう面影よ抄りてふんかくおぼられ もうけ
今へくるはこうろおくして 細 紫上と思ひてもむくしや
しうゆさうつふうても 細 今いんちぞうるよが 紫をそふるを知らくしてく
ろく 細 るんやすくしてまべきぬ 心示るを切
こそとく いさんハ袖しのびてやむかくへりしと かをそ
やそし此さうぎんぞて まうらう人しるざやうううき世よつて
孟 後生菩提のしあ此精 とぢよかうしさるんと抄ぼをばやかて此さ
をとく 細 聖廟も後 う志んめて物けられとこるひてかうれ
精をのすてるし也 此云唐 細 夕霧也 孟 元ハ京、まり此文の中ほとよつけてく
宰府よ此下向のうち不 大とのりの云の此うしいでしかうくめくしい
断此精をみくぬ文法
華経と読誦せしめ給
ふうひゞ叙意子言の
中よも微々抛愛樂ヲ
漸々謝葷膻ヲ
又重陽の比他よも菊酒ハ

為諚綱長齊終不破

そく
あくこの内ハ　細 人の訳
のみハやここはあしねども
といふはいかゝれるやと
あり。父男のをまり。ハ
金玉のをまんりしるき
とや。夕男ハこのりさ
人くも何るあく恩愛
の中よハ主従の中一段
大切なるゆしく
かりそん　細 俊寛あるこ
おほせらりれ息子ハ人々奪
ゝ伊勢より足まへ
法佛あるし

とうかしうれど、その門りしうあひらてん。（細 維りハいかいまいへにさしえ）
（細 祖父母ましませハ心やもうをさとく）とのりしさん、で抱しまへばうちつめくう
ハあしくとせかりしたとうく。ハ中く二而た
ハまじてれあくぬまやあしん。侮こらやさ（細 菓子池之於注谷）
（よりの川善伝と今いひ出んとそく）はうしくもし維のまされはありしてくが。
（細 六条の川息子へ之）りの浄瑠の家へもれつつひありそうゞのれ（川息子へ之）
よりをみりもんぶるめまいまりのおきこうし
ぬことどもみさまてり。云の袈裟づくひを（細 川息子をあるろく）
どハ人よりてとよおす侮めくしう。つくり
あるそしらりすきさノてとは地すひを（細 川息子の父の殉く）
らんぬ川もまねどうけ維つうもめぬ釈（細 其の父のやうな）
（まとゐふくく）のふましひうしとすんぢりとも無月（細 やそこ庭ハさしくし）

つきかりき　細 殺身のことく
花ある欽定そてハ仏經まほ
をふれぬとるるとつきよ
りしとハつふとうて如何只
殺身のかよらひまるて
うらんおりうべし 孟欽定
まあれべ仏經よ係るま之
焼よハまりくのらひらけ
神事に仏經よ携るゝ
也あげいの宗あり不用之
らくしひ僧の中入庭大府佛
維とよよとくぬるとまを
著作息子の欽定よる経
るゝ之神ヶ所よ孫するぬ
よ經と忌とつくく源氏
よあそうりて物そむゝ人
すれハ両白き也源ハやら
て伊京あるべきが欽定
がいつくもあるきろるんが
對面も催さらうかふらう
こゝとやりう 細 嘆一意 孔孟
第一意之 可匿不好
淨瑠璃や 細 落るひつめ
しう面白しお源ハ嘆りき

ずて維くしじとおひやり当るしかきすりみめも
（細 安徳あり）つくみうさ男のとくてそ。ゆうさ当しさせんて
とも見らうかたりうべくぞれ
（細 息子）うちさめうりいとも代のあまでん、ひやまと（細 ましそ世の名にもてましとやかれとせ）
しほうてふもの侮のうつめとうしらの門よ
拙りしへさまんをぶうろし世のありさ海まもお代（細 老しまそ）
（文の殉之）いるよなりもろべるうよしと拙かりり（文の殉のそまよりもくとえ）（來今良之）
（文川息子詞）淨瑠璃ややありひのくさよあさりてとほ
ひかうさは我身如そうりのをよ義とざきし
みろきてにうらとおさくうさこ又つくゞさ（細 両白をそら）
うらのつくて留め投だらうりとおそさつゞけて
もとつききちよご宗ありゝ。えよ拙うひそ（細 深のん中之川息子をあ義と云）

て海渉しまろべしといへるあり。昔男ハなきてしおほきさとハ奥まであまへ
しらう斉のおりてハ噂ひはあやうしていひあるべきすなわちぐさもなさにやむハ源氏ハ定
て海渉のすまわのなべしといふ歌ものこしていふひなきハよろ身なりくうちはして
義なりさしや

えし人を。ひとふしうしとおもひきこえし心 （細 葉上の事）
あやまりに。かの御やすみ所もおもひうじて
わかれ給ひにしとおぼせば。いまにいとおしう
かたじけなき物に思ひきこえ給ふ。おりからの
御文いとあはれなれば。御つかひさへむつまし （御息所からの御使とよめる也）
うて二三日すへさせ給ひて。かしこの物がたり （御使の事など）
などせさせてきこしめす。わかやかにけしき （細 御息所の御使也）
ある侍の人なりけり。かくあはれなる御すまひ （源氏の事）
なれば。かやうの人もおのづから物とほからで
ほのみたてまつる御さまかたちを。いみじう

しくめでたしと涙おとしをりけり。御返しかき給 （御使のてい也）
ふ。言の葉思ひやるべし。かく世をはなるべき身
と思ひ給へましかば。おなじくはしたひ
きこえましものをなどなん。つれづれと心ぼそき
ままに
（源氏）
いせ人の波のうへこぐ小舟にもうき
めはからでのらましものを
（又源氏）
あまがつむなげきの中にしほたれて
いつまですまのうらにながめん。きこえさせん
ことのいつともはべらぬこそ。つきせぬ心ち （細 是まで文の詞也）
しはべれなどぞありける。かやうにいづこ
にもおぼつかなからぬやうにきこえかはし

かく世をはなるべき
細 文詞にかくはなるべき
身と思てかくなりゆかば
ら我も伊勢へ御ともし
て伊勢へ下へき物をと也
をもはなれし 師 未考也
まことのそらにひやうし
とよれハ文の詞也と
ある中にも我まよひ
なり詞なりとていにある
さるべし
いせ人の波のうへこぐ
細 伊勢人ハおやしき物そ
なそしとよめる小舟上の
つらく波のうへこぐひと
ここに御縁すや 岷江 師伊
勢へ下とも我ハ波の上
こぐおやくさるハおりとも
くろうき目をみぬあふま
じき也との儀也
あまがつむ 細 我身もいつ
となきなげきぞ なさま
でくるておやへ苦しく
ひまがつらん物をと也 御息

不より二首あれハ心える〻と用しとけり　さき〻に御息所のみこ〻にて〻ん〻すき〻〻〻〻人〻れと〻〻〻〻け
こ〻しきせんさまの
て〻らひの御気色しく〻さん〻
花ちる里しうおし　抄　光も〻人又つかはれし由源より〻又ある〻し

あれまさる　細　此昔の御又
花ちるさとのみしよう。
御方のあかしかしき御く
かたへきをとこてうしるき
て故郷の御之心中。を
又あわく下のるらく源をお
んそ〻らつ大方の人ふく
ハ源の御新殿の御をまゐる
もいか〻しくみ〻さ〻さ
も仰ら〻らく〻ひなく
みくらつ晴気の気も同
げまむらへよら　細　さて
そく源の御かそ〻盃源
の念寄り給て御よ葉藤
こりかまよのとまか御八
かくれ

里をかれしと思しいりけるに〻〻〻さおはさ〻あ
給なり侍ら〻く〻く〻ましき〻をめるれ　（給人ありの）
ぬれちしていつれもしらうてすくさめ
あひのハりの御すひのよしかくさかあり
わかれまさる花の色香の袖かをまめつし
げくも露の御袖かれとある色をまさむ
ぐしよりかのうちにこれをかくさき御
まそ源のいとへ見えしやりてながらあま
つら思〻〻れてかしきてまへハ宮の
けいしの御よ源つかしてら〻〻園くの

らん人の意ハ　細　朧月夜もかくし也
はとよわりき也給しとみ〻日
箋　源の御かへりきひめり
を朧月夜おほされハあり
尚侍退出事或記曰九條
殿六君尚侍綏子参春宮
有寵私与弾正大弼親之
朝臣密通後退出猶妻之
抄　そく〻ましう　細　二条の后
とぞ也朧月夜ハむかしの宮
みなれバ也
こやかもやう〻らまま
抄　かぐ弘徽殿には弘徽殿
へも朱雀へもやう〻すこめ
て東宮へせて〻らく〻し
抄　是も源をかくやあると〻
て朧月夜をバやなとき〻
れさるよ故のちかひさき
こ又朱雀院の仁弱なる
故也
抄　御やけふ御の　抄　女院又
哀ハ帝の寵と思ふうくふ
うへきんし。尚侍ハ下八女
安まそゆ職ある事也

御らむのよれかしくかしき用さまて。つらうま
つるべきよしの給ち源いんの君ハ人とるよ
いとしう見しらけなりしど。ゆるしいとよる
しうあ給ふそ〻ちらよる〻御もやう〻ち
おもそうし給うれハ源ある女御と〻御
おもゆしと源。此源やけしき御のさやかつくと
見しるまさう。また御みそうらしゆくへしそ。
いかしきしをいそうしか。ゆかされまきて
東まへきまうけても色代へまてまつること
のそぞ哀つの見し給けるか。七月よ成てまゐ
あ給。いとしうし内わりひのまくらかれ
がし人のそしうもまちうしめされしも。例の

まはぬしを露とうけうつる
らすわかべうしれば何大やけざ
御の文仕ざうりをしのけはの
ゑりますく
りしてさ共のよ人
孟 勝へまして勅定之義勝
のん事を奉りての給ふ
御わくさゝんく
源の御かり 細 光皇の御ふ
うもんばへらし唯斎の吉
よ源の御書えありし
こしたり 所 源を流せ
まつりけく
世中こそあるよつけて
細 源氏の御也 所 源のう
くなりまあまつりても
世はあしきうきくもるな
きものしかゞしめすと
のんとありにつけてもと
かうておりもやうよさ
たあうてありさせまか
こころく

へまつりまうさせまそてしろいよ振まひ
は義よらざりせ給。御さ殿かうちらまいとなる（孟 朱雀院の御子勝月のこと）
まめしうさせたまへれど。出ちうしろを（細 源の御内侍のこと給へなるべし）
御かたかのうちぞくらびげるさ。御あそび
のつねでよ。その人なることぞいときらく（細 勅定也 五條の御事之）
しられいうよありてさ御りふん。御用かしん。（おほかたも兵のつきゆへ）
あまごろふをひらるきんらすうかれと
の給ひて 源の御かたの給ひそれかんと
うどへつかはつきうらん人りとそ 源ゞ事せ（細 勝月事く）
あまえるみんじ給はず。世中こそおかりまつ（孟 勅定之）
けてもおぼしくさすき物すかくれと。思ひたる
まこと人くて世ゆよあんしんりのたまふさせてに

いけの世よとは 細 あらまし
人皆はかなよせんいかなる御
なこそ人はみなかりされ
心あさくえしとし之 明 ある
しらん後は何どんとあり
はようめしく 朱雀の勝月
よのさまうつ後の世よりと
こそちがふべうれとせ
ようぬ人の 細 つざ御
の人とくうしもかなる人
のかひ年しくらく後世と
まそうけて世るべき物
をとく花鳥まうられぬと
は中のよみしぬ人をとゞく
世年
まりやいづまよ出るふりく
細 源氏の御猶之旨御ふり
う源の心あうしく 節より
やうれバこそらかみく源
氏の御よこかうる別と
後ももらゆくとくわさせまふ
御猶く
いかうでみをしうら
細 是も勅定之以内とそ

おかしぬ。なかなかいとゞ物のやゝべき（朱雀うれよせまりて勝は何くしわかんと同つく）
かゝき猶の別にぞひゆしられんとてゆき（孟 源氏の別まへりくまはせひおふさしさとて）
名れいけるよしとげるようしね人のい
ひをさかんといてまうしき御さ殿ゆく。
ものを殿こゝよ表し突入ての給へすら
よつけてかろくとこわれいづれのさらやい（細 内侍うくこ勝月の御事）
づまよかつろよりこの給ひて渡。いますぞここ
さらのうさしてさうじてくなれ其名を流
の給を世て振よせへど。いかしくねこしらと（御 給のゝすを出かりて朱雀の御かつく）
いづくかれべんぐらしうもしし世の代に御ちく
ろのかりよまうしらすし給人べくしわか（孟 右大臣なとくしわか）
よ。すすきにころのつきさ所なすさ給うぞ。（孟 こりしの御ちる之）

今上も清涼殿にてかゝる月の御あそびにおもひ出給ふ 細 冷泉院と東宮の御所の御とのゐにまいり給ひて 細 あそび給ふ 細

さて云ありしとの也

よろしからぬ心も

あらてみえたり 私 勘 漢高祖八男あり其中の淮南の厲王とて呂后の母として

養之後に清文の心ありしかば八男是に准ずべき也 細

心づくしのあき風に

河 秋の末つかたの

月のころなれば心づくし乃

秋ハまことなり

海はすこし遠けれど 細

海のつらハやゝ入て家よりは

こなたに山などもあり。

さて海ハそこより遠き

関吹こゆる 河 續古今集

旅人は袂すゞしくなりにけり関吹こゆるすまの浦風 中納言行平

中納言行平へとびくの浪を

すくいきにかかりける

こゆるとも海のかなたにせ

細 弄花 詠歌に其心見ゆ 秋風

の関吹こゆるといひけん浦

いとをかしとおぼすことも多かり。須磨に

はいとゞ心づくしの秋風に。海ハすこし遠け

ど。行平の中納言の関吹こゆるといひ

けん浦波。夜々ハげにいとちかくきこ

えて。又なくあはれなる物ハかゝる所の秋

なりけり。御前にいと人ずくなにて。うち

やすみわたれるに。ひとりめをさまして枕

をそばだてゝよものあらしをきゝ給ふに

波たゞこゝもとに立くるこゝちして。涙おつ

と行平を此浦波とのたまへり

れ行平此所にて歌をよめり行平とかゝれたるは

細 行平八雲見ゆ 何今集行平八集見より八史筆也

此流のなる波行平の中納言の関吹こゆるといひけん浦

うらなみといふ心也 前よんづくしの秋風にもさし渡 浦波と云り

とひろくみてけり 師 弄花ひくよしをよび

詠人の被浮くのうたを 被露なるとはつ

まへしとそうたへよものゝ

まくらをそばだてゝ

河 猶孔の府にまかり

飯くりハ也の枕もうちあけ

べりあり 弄花

川のまさればや 数行の

枕のうきてとあるらん

らん 細 孟河

まくらうびて 細 南殿中納言

の声今 神まかせさまぞ

かは 抄の義もみじかき

とこまりのふらうせ

と読まひしも此条を

加りつるなるべし 師 秘

古儀てあるねよまい 細

波ハ我らかへも切ありし

心よ思ひ切とさんまもぞ

てこより吹くる風にまよ

ともおぼえぬにまくらうくばかりになり

にけり。琴をすこしかきならし給へるが。我

ながらいとすごうきこゆれば。ひきさし

給ひて

花 遺愛寺鐘敧枕聴 白樂天

恋わびてなくねにまがふ浦波ハおもふ

かたより風やふくらん。とうたひ給へるに。

人々おどろきてめでたうおぼゆるに。忍ば

れで。あいなうおきゐつゝ。鼻をしのび

まうち波うれバ報ゆく善
よまいふかうんと見ゆる
くめて見んとし
けふいふは 細 源の人之何との
人ゝ言報身一人のあまは
ゐやうの住あとぞもし給ふ
となり 晴 源氏の心を
何の人を憐くのこ今
の源氏の心をゆるしを
こそまゐらせ

人ゝのこゝり
細 若紫乃巻まいゝよ花
生のまゝしくまゝるせ
結りしにしまし事也

やうよりこまつれ。けるいつゐおもらん。我
身みそ川まもちゝやくゝしかくゝし時
立てるあれば。得るつけ川くありらん
家とまうれてけくまじひかぐるも思ひ
一のうせしそてひとくあまりひまうじき海と。
んばそしくもらんと思ひそば。ひうくて
細 人をなくよみんとまそてゝくて絵之
よられとぞくふれどしらのまゝ
らうつれくなりまくよいうくのゝ絵
つぎ川ゝよるゝひと志のふ。めぐゝしく身
き海なうゝくのおやるおもしの海くの色ど
をとうきすまひまつる。屏風の思ひてど

まなつゐのり河 石高名録 常則
名字天暦ノ御記中多在
見 略 記之 細 千枝常則
皆絵師也
つくり絵 晴 源氏の墨が
き絵師よ色どらせしや
といふ説あり。只色をを
うる説なれどもうつゝ
ぞやといふたるべし 細 今
源の心きすふハみな墨絵
なれバ今別よ彼絵師
どりよ色こそ絵をまさせ
てみせたまへるやとて
河海説如何 河 作り絵
彩色記
墨書のうへを彩色する
ところ源氏の心をうれ
色をば彼筆よ色どらせ
つやとし彩色ハ画師の
口傳有之
おりしるゝのありとは
上ほしもの絵まりし
人おもそるなりや
牡丹花 説之

まいあらし海山のありさ海どつけらのおがし
やうましど。はしめよろこくぐいけよとよぞね空
のうくもぬる。なみくゝおりあまりん。この
びの上はよすかう。よ筏つるのりれども
てつくり絵つくまらをぞやと。心も
しあらりあつりありしうめでたさこはあり
き海よ世のすれなひとみれてらうゝるれつ
うちまくどうまついさこそ四おゐくら
ぞつとこゝろひろ。前栽の花。みくさ紀
そうれ紫よきタ暮よ。海こゝやくゝし廊
よ出まてうつしゝ給い。き海の中くしう
きよのうしなうるも。こうしん。うしゝハまつてこの世

白きあやの　花云　河海ニ
白き綾の御衣ニ紫苑色
の指貫などをきたまふなり
又紫苑色も同く表
の色といへるも遠あらず
くれなゐとかねといへるにや
うすむらさきといふ色也。こまや
かなるとは衣の裏表地ハ
平絹の無紋ゆへもあれ
色ハ紫苑花田等皆あり
俗に見るは花田なりけり
ゐのこきとこまやかなる
しるべし　細　花色紋可然
河　紫苑色ハ表薄紫裏青
モ二　あたる色
しやかむにぶつでし　河　釈
迦牟尼佛弟子某　仍今
頂礼白佛言夫菩提道
樹之月執隠沙羅之悲
雲下暮　本朝文粋願文
称尺が逸法を受継て
行ハ天地年尼仏弟子と
いふ　細　金剛佛子某など

のなよゝかなるしをん色などたてまつりて
（細　なよゝかなるハ和の字の心なり）こまやかなる御なほし
やうらかにうちみだれ給へる
御さまにて、しやかむにぶつ
でしとなのりて、ゆるゝかによみ給へる（細々ニ濃紫）
世にしらずきこゆ。沖より舟どもの
うたひのゝしりてこぎゆくなどもきこゆ。
ほのかにたゞちいさき鳥のうかべると（孟　舟どもの　河　詩にも鳧舟と作れり）
みやらるゝも心ぼそげなるに、かりのつら
ねてなくこゑかぢのおとにまがへるを（詩に雁陣とも）
うちながめ給ひて、なみだのこぼるゝをかき
はらひ給へる御てつき、くろ木の御ずゞに（細　白き御衣に黒木の念珠のはえたる）

ゆるゝかに　河　緩也。のどやかなるべし
よみつゝ　少
かぢのおとに　花　雁櫓にて
まがへるハ　細　雁の声の悲しき
ハ是も我思ふ人の歎
也と又云　何人ならね
物かなしきをりの雁鳴こ
ゑのめづらしきものには
てあるなり。此さとハ
声を聞く悲しくとおもふ
云へと備へ故郷の人に
歎きつゝ、[illegible]
空花也　晦同
かきつらね　おもほゆる
[illegible]
師　昔の友よおもひ
[illegible]
へ此の雁ハ昔の友ならね
ども、思ふ人をおもひに
てのこれ折しもきつらね
そひ出て[illegible]
晩　惟光之銘雁
の恋をとへるに[illegible]
[illegible]

（細　雁陣易迷秋嶺上　鳧舟難弁夕陽中　此ならず叶へり）（師　是ハ経をよむこゑにまがへるなるべし）
ふるさとの女こひしき人々の
こゝろみなぐさみにけり（源を見奉る人々…）
源氏
はつかりはこひしき人のつらなれや
たびのそらとぶこゑのかなしき
とのたまへば
かきつらねむかしのことぞおもほゆる
かりはその世のともならねども。民部大輔（細　惟光也）
こゝろからとこよをすてゝなくかりを
くものよそにもおもひけるかな（細　…）
とこよ出てたびのそらなる

よみけてみるまでもなし 紀 紀 細 我今謫の身すてに云也。謫居と華 月ハ秋ならぬ
かくしまそ風ひもよも今ハ我身の上なりなるらむと也 師 秋も恋ども悲しきよなり
謫客とするれバかくよめり 花とことハ仙境をいふ。春秋のうりもなきよ
て寿世とハいふり 唐ハ和国の世をさるれるよそむ為なれハかく云まするか也
とこよ出て 孟 唐の謫の事かく出ても友をよのそて一つれあれハいふく哀もあり
ごとく源をすみ中てあるまくし 師 つくるハ唐のつくるれる友をいふと此云ハ源氏をを
信ぜるまじのるけるとや
ともまじりて 哢 唐のかく
かれ哥の故をなまじりて
いかなる人といふ之我身の
友をもなぐりてかなうより
なりし 明日 明 いつくまでと
涼しもかゝさぞいふと
やのひさち 哢 右近のせうか
父のかみ之。紀伊守か弟之明日
孟父よ隠てかしこにて所
代やさしく 細 源氏よなくね
志さかひきするひとく 師 源
よ忠義の人之志しよ見え
さり
こゝも八十五夜 秋こそ八詩
哥義経の御桂もあらん
およそしよりおもかきう

つくるよそれね給ぞるぐさむ。なかゝにえ
してハいうよ待しもしといふ。おやのひさち
よぬそくぐりしみとさそそれでまい
きうぬそり。志くこみはさひくぐくべかめれ
何れともとえ
どの唯ともよりてまて一つれとすさ海
みしわりく。月のいとあるやうよさつおきさ
源氏之
哥よ。こうひハ十五夜なりとりと地れ
出そ。殿上の御あそひしひぞて。前くなかめ
給しんりしとおもひやりま給よつけても

御心をとまりし只月の花やかなるまつりて少しも思ひ出るふさる哀なれや。此物語
こそ此物語を八月十五夜に出そめしも此須を始として河海よ志るされ侍
月のかほのミ 地哥りつけ
られしき他 表すやし
三五夜の外 明 三五夜中新
月色二千里外故人心と
楽天か作し八楽中よそその
給ハるを誦しくして哀る
殊勝のよし河海よみえたり
入道の宮乃きりやへつうと
細 柳の巻よこそすみ也
よ身やへだてらるの宮
我ふけ侍りぬと 細 人々の
中世にも物思の有さ
まかうを慰めむとなれ
花源の月と入給を入の
ともつさまよあらむと物思
へすくさを有ぞさあそそ
まつりく
みちかくぞ 細 月をみるか
どそとる旅懐をそるくさ
むかしの秋のことを月
よまよりせてよめり
そのよう人のいとと 細 柳巻

月のかほのみまりくれ給。二千里外故人
心とすしりましくま。例の源をとなめくて
入道の宮乃きりやへつうとの給ひし
程いえんもさことひそて。おりくのこと
さひ出給よよしとるれ給秋ふけ侍ぬ
とさこ哀れとも我いりのまた
みち程ぞそ志なしさすこさむめぐりあへ
月の都ハともうれども。そのよう人のいとる
つりうら者相くらやけしと志給しにさ庭の。
諌よ彼そもまかり給へりしも。恋しく
さひ出ときてまそ。恩賜の御衣ハ今こゝ

九重を悪力やつぶろ々の守にかゝる頃しけのるく孟さゝきの巻のすゝく帝の御手を
源の氏右出るゝ仰られ九月のすゝ七日の月やうくうし出そとあり月よりよ
て源の氏ひ出のふすや
むかし掛かりるとも御歌をよむかしいまの御物語申しあふ御かくてかも後よりとよう
みをそまつりまでとあり。源の流罷ハ悪右の誂えの中人すれでうして帝にとう
とはるくてその川りしくねりひまつりとせあふるるかし
恩賜の御衣　天子の御恩よしまつりし御衣と云心之　細　聖廟之御詠也　ほ　去年今夜
侍清涼秋思詩篇独断腸恩賜御衣今在此捧持毎日拝餘香後集　おそハ聖廟宰
府ニて去年九月九日の宴に秀逸の詩を作り給ひて勅禄に御衣をたまはりしを後ちに当てそ下
りまひて思ひ出て作りまつる詩之源氏もそのごとく御衣をまつり給ひしるすわすまんとれ
とを思ひ出るゝ　細　源の御
おぞえまうしに
衣を帰率あるべし此物語
の例かく出来しくやそ
実くるゝになる数あまさゝ
而あり　暁いつ給りあるゝ
ありまよんに給りまし
とへみしらり　明日
うよのことし——ねかれし文
細　数身はやうの身なり
ても上へ根ハおきこえされ
ど又時とくらくなくらめきき
こととしあかりうそ太かし

よありとむすしつへすぬ。御ぞえ。まうしとに
身をさまるゝむすゝきよとらるよとききあつり
源氏　つしとのそむ人よ掛ハ抱りわしでひ
ぢりみぎみをぬるゝ袖ぬれ。そのうろうだ
桃李おとの身なし
歎ハのありげ。いふめしうみいひろく。ひもをそ
孟　五節の文歎實きこ之
細　らことのおりもおやで
めぐらまそ所とおりけ。い。如のそこは身
逍遥　位ゑく
まそのかり満づてひは世うしえうかし一つ

一篇はおもくれまハあそびて御衣を身はなそくうくしさんもありしと　明日
よその御大哉　細　五節ハ文を。紀筑里奏子に二蔵よ源氏あひ給ハみくらり。又の但くて
上御ちゝう文　師　職貢令曰太宰府帯筑前国師一人掌祠社戸口簿帳字養
百姓勧課農桑貢挙孝義田宅良賎訴訟郵驛傳馬烽候等之事　記之
大貳一人掌同帥下署職原抄曰寶亀十一年勅大宰任限為五ヶ年云々凡当府都
督九国二島則帯筑前也　ホ委
つまて引ゑ
母の細よ引きたり五
節らぐまうくれ
こうろく
とうりのさ海
須磨の海さびしさに職
夢おりし源のかりをも

うるよ須ししらひもあつきとまくりは
次戸の濱辺といりく
きはんとかりよおねくしておそすとき
けいおひらうらかりわくてさむもとめく
いなのなく
ちは身のしらさへかづしけんげさう
孟　源よ
をしらおしてゑをうのくそハつるそ後さ
源のり川
まづるも口あしまうよまうへの声風よ川
まそろうまときゆうよ。ここのさ海
人の御須ど抱のるのの人須そさうあ
川めぐんありうぎうりられなさくにやり。

帥御せうそこ　細 大武を帥と云よりハかく
れたる帥と言よハ々也
帥ハ親王の任なる官也
権の帥などいふも有そ大弐
ども御任とせ給り親王
ハ大弐などかきまじる也
権帥のなき時ハ大弐
ハ大弐などつきとう也
帥大弐と帥といふハ帥の
闕の時ハ大弐か帥の事
をとりおこなふ所也まで
第十五巻伊予助とある所
に花鳥にみえたり　明日
まいつ　孟 帥が事ニ
まいりのぼりくハ先何
伺して
このちくぜん　細 此筑前
の守ハ源の御恩を深く
蒙りし人也
源の御そば近く召遣ハれし人也

孟 大武と帥と云く　そちの御せうそこきこえたり。いとはるかなるほどより　一任の君ニテ筆之　まかりのぼりては、まづいつしかさぶらひて、都の御物語りもとこそおもうたまへ侍りつれ、おもひのほかにかくておはしましける御やどりを、まかりすぎ侍る、かたじけなう、かなしうも侍るかな。あひしりて侍る人〴〵、さるべきこれかれ、まうできむかひて、あまた侍れば、ところせさをおもうたまへはゞかり侍ることゞも侍りて、えさぶらはぬこと。ことさらにまいり侍らん」などきこえたり。このちくぜんのかみぞまいれる。この殿の、くら人になしかへりみ給し人なれば、いともかなしう

源ハ君の御恩を深くありがたく
思ひをり源ハ謫居の所ニ
きたり恩賜の御衣を携て君
恩を忘るゝぞ又三位中将
ハ朋友の信ありし傍ニ来
源の御歎是ヨリ出ル也
まがまがしう　細 不祥也
明今の世にもいまはしき
ことをまがまがしきと云
いふり　明日
まだ中ハさしてきこえやう
なりとゆるしく　伊大弐ハさき

いみじとおもへども、又みる人〴〵のあれば、きこえをおもひて、しばしもえたちとまらず。「都はなれて後、むかしのしたしき人〴〵あひみることかたうのみなりにたるに、かくわざとたちよりものしたること」とのたまふ。御かへりもさやうになん。かみなく〳〵かへりて、おはする御ありさまかたる。そちよりはじめ、むかへの人〴〵、まが〳〵しうなきみちたり。五節はとかくしてきこえたり。
細 源の琴の音をとゞめ
琴のねにひきとめらるゝつなでなは
たゆたふ心君しるらめや。すき〴〵しさも

かりの義ありと云く
これもみる人もとらむ
とのぬく　細　やそ代を
今よりあめそ並記紙の
ゆきの乃あらにも書き氏
ふぬかりて　唯ふかりて八
ふ者ら小心と心の八兄明日
細ふかりくらんうかりく
しりそ　師うあとよりを云
おそひひるがらくするらこ
とくそうしと云りかくく
つそりせんと八　細　篁が歌ひ
こうひとのかれまをそ
わくにわまのみそうされ
つかりせんといめくく
むまやのきくにそそくて
まう人も　明　おさへ八驛く
の長をう八句詩也呂詩
え河々八口詩ありと
書つけぞて口よふ詩
之白氏文集よ口号絶
句ともく日本紀二八口

人まうしてめそと笑しさら。頼てみえそて
なりけり　こ路いしたうつけなり
菅原是善　くれりてひとそのつかれにあるさうぞう
也まうやともゐのうへろまいさりまんとはれ
めはざらし　ぎもやとあり。むまやの地さに
らうどうしすうら人を見る　者也乳助字也　菅相とそて女子
ならぬへくかん揚く乃りさやこのは月日
もぐうおしにみをとをまでめくくそまのりで。
こひうきあるおのうへ揚けり。きゑなりし
てつねよおりしそでうこのひてかうこまふ
ところそのうつ清めれとまして　細　王今食堂之　令嬢の歌
もいいしうとも義よりそそしまうつら人也の歌八

まあり或云句詩四句絶句ふるありで一句の詩之大鏡第二云菅帝相あかりのかけ
ほくしへろりきひろり内懐この明心の驛よとくまりて給ひよ。かしまやの地さいを
しくまうりしきをかうらんじて作りかさる驛長莫驚時変改一栄一落是春
秋　略記之　驛長　心なき驛長ふく聖廟のばうと地をとひさうと作絶へしてうち詩とあ
つい只今源の新よしくうつしまふ又菅公の志ハてびハは況んだし人うれぞ代まうしてよあらそ
まいそうど氏かの作用べうらん　細　聖廟の清句河海よみくらうの公八公るの詩を聖廟
公公よ右君す作せらけ給しざうる末代よめうその公寺八まりて今五篇をよせつりて給
みて後代までもすかりくことなかり。又菅八今公御消息とやう。うにて詳とも系あ
あつやうに思ひうちへし。宮まよおわうとまうりてあまでくもさかべそうや。公代了題乞
師初の後八元亀の驛く錄の義　篆と同し一用也　仰源氏の出まなれバいくしとはんのうふり。出り
入名の文八表文の出をまをゆくまうのを
よ源氏のつくうりままこうけていよく出りかりさ路之

書ぞ文のはくしとゆくきりのとも揚しくこり
大ねもうくさまとらへ路めうの役いとじう出たは　源よ正
しみずけりうなもしかくのみこすら。むつ
まうりし王道て　細　源の兄弟之
ありうらうそこし路しんずらめかうとそ
じめつきハきつりひさそて路ふとあり
さ。義かそう文とつりうそうしとされはつけ　詩之

めさめしう　細　ふのやましき
わか海をまむつく泪
よつ声く涙の我けりあるを
かしらくかしけるくあれ
まとく

此河の　孟　志川くハ細ミ之
細　水びろかす人ふハ志川く
もこしそひこをんとて
んあの序云

のこ海りつらぬ人志しぬまもしん
のらんをもまつすひるしらぬれ／＼らよ。
めぐ海しうらしけるつらび川ら　めが
まつ、煙のたとちつく／＼立ら絶れ
やあまの苫やくあつんと此間しいら
ハ比らしますらしろの山よ。柴とらふその
めとふろたらくら。柴いづしらそ
（波）山河の川わりよしけり志づくてもこと
そひとうんらつ里人か身よかりて霞ふ
のしあれる比衣のたしさもこよそこく
なかめつくらんと川もまいみえてしこき
しまをもろとも（武矛の古備之明　惟光之）大備よし留みつつきてめ（良清唱之）

昔胡の國よ　細　漢の代
元王昭君が胡國の王よ
嫁せしかハ何かしもあり
るすられハまくもよ及で
ふときよハ我もかへき人
なとしもやりの王色を
やりさくたひいてかうの
るまとうそりらんとし　下略
明　王昭君也義　案よい
らぶさあくへ琵琶と胡
の琴とひて琴ハりと
ひ給らたし
ましていらすりらん　牡丹花説
そかりやら人出しきハ昭
君らんハいうちりらんと
雲の後の夢　細　胡角一聲
霜後夢漢宮万里月前腸　大江の朝綱が昭君の
詩なり　併胡角ハ胡國
の楽器也　ふき物と云て
ゆのよりの夜徐さ衣と
細　わりのみしうきや秋の西白
し古宮の的よ　絲衣床
塵見青天と云ふもん

まびすふんとじめてあはれしおりてらど
ひきまつるよ。ことりのく声ハやめて（細　漢の琴は声に感しらく）
悔とのかひあくらひじり胡の（がこの　くるとも也し）
うしけん女ともかりしやりてまていつ
かりけんこの世よ我も愛ゆう人なくぞ
さめつよハたちつやらさらんとかど
そみをおりむこのやよゆしく（思ひもあるべきすの心よハまくしく此句とせし）
て霜の後乃夢とすし俗月いとあら
さし入てつれき猿の此ましおへかく（奥より）
まで夜者のしゆよよる衣うつき声
をことものかさの月をどつくこゆるまで
これ西よりかりとひくりぐらあて

ちかひけのうぢりきん八
何考辞 日本紀 細 勅ヲ
也勅勘を云り 明 えだり
かどのるせ 孟 次ナヘ卩通
ぜられたる人くは係の詩
奇をよくわきまへしらう
などこまるよみたれば
弘徽殿のあしき御よりさ
なりし
そのよつとむかし
既 趙高かす河海よみて
より始皇本記に趙高
が乱をおこさんとせしと
源氏の御会にいうろめ
きさんあるふたとて源
にんどうよりも人々を
彼群臣の高に何しく
馬といひしにまよひて
大后の好さすつて 細
河史記曰趙高欲為乱恐群臣不聴乃先設験持鹿献於二世曰馬也二世笑曰丞相誤耶謂鹿為馬問左右或黙或言馬以阿順趙高或言鹿高因陰中諸言鹿者以法 秦始皇本紀
ひんりのふるよまゐつてひし人
細 物源の方にまらふるを
也所中ね中勢ふうの移
人あり
そこらのあうる、
細 係の是上おたくなく
しぎもことつらせとて
あの清をまゐる
細 すうつさいう

ても世中よのこめでられきへばさきへのこ 細 弘徽殿也
やこそしめしていみじくのあひだりみれ
やけのうじかみの人々え、今上まゐらせてご
の世はわがちひをさるまゝにしくらう
よそおゝれ、おもしろき歌るとて、世中を 次にの家作りと奴ナなく仰之
そしつもりてそのきみ紙馬といひし人
人のひがめるやうに川いさすかじとおもひ 追従
しきこともおほくなれどもつくりしそ。
そしてせうそこおほしまゐ人ありし二条院
のひめ君は往ふかきによかしるくさむ 孟 若く
あり人みしひんがしのたいにすみてひし
とかでもこれよりましてなでしめ奇。
まうりくつくおしよなろうしうなうしさの
あらそ海、まあやうるうたうろうらへも思
ひやりかくく表たれいずそてちうりまし。 孟 巣の小さき也之
なべてすらぬきしの人でよいばのまくら 細 たく源ある海之
どし縫そこくらのあうよもぐれ さら清る
ざしあこしくらり 然さり ところそまろ。
うの清を海ぬかはぐへしうわうあしに流え
稀んじもどらんおじうみわし まへど、残りざ 業をひろひて八源忠しらく源の世かひえ
よあるさまししさすくをし此やゆうをそぬよ。 うらえ違の弟をゆるなく
いかそりへらぢしてはづきるうくむさ海 業をおぢらてた之
をさびくし縫ところよつけてかよろび

かくろまや
みちられかしよ 細 天廻玄鑒雲将霽 唯是西行不左遷 菅丞相詩 現 月の行さ海くし
月ハ西へ行て東へ不行左ハ東より西へ行 師ニ源氏の吟すふんし月もまさしく西へゆく
との又ぐち我左遷の流されしごとくにハあらじ只西へ行のミ之と歎きらしやミのみふんく
まれよ沢のこころも月の見るらんすもらづりしとまこうつり天ハ左旋し日月ハ右
行もとて天ハ東へめぐり日月ハ西へゆくまうらしく白虎通にあり勘考すべし

源云
いづくさの雲路にまよふれこもまらひつ八月
のうらんこともなりしと思ひけら給
て例のまどろまれぬ暁のそらのまよ
いと哀よなく

源云
ともよ見るめるし多くまふく暁ハ紹り
雅気の床もあのりまつさうふ人もみ
されバ返てひとりごちてかしそら秋立

ろばさの 細 我ハ左遷さるるを
彼住月ハ雲路を行ねれ
じ抑られしき時よりれもま
どひふんとのうらもや月
ハまよりぬ拘るれバ我を
年じいりて右が海まへし
りるまじすの字をハさせて
いかで優よみるべきさや
入方此月の行もおもろな
ささ海ならとみろく浄身
よ此さくるさ給ひや ま
師下の句ハ雲路行も月ハ
実ニハまよりぬよ我ハ左
遷のとがれバ月をもろつ
しとなれんし
ともちどり 暁
源氏も入我の人よりも
かふうまやらく 細 落白西白しよのりしとハ我も我人ハまよりあるなりふ
てハおうべさうしく之 師 よ香の我うふ一年よつさて我もやとようのこまさえ給
られぬまくにさ海く哀かうし
さわめつでららさ海く哀なり
をそろくのさみおしのくハ
源の此ありさ海よめでく
人く流おりりとさるぬと
え
家よおりしさ海 細 さくに
御云すら人どりの色次
広みくのれ乃やどりへ
のう也 孟 何作の人々の
私宅へるまり
もそうをもせぬて 細 ひとそめ
の名てすハならくて文のう
さよりかやうにいつく
けひうざるん 細 むすめ
のうをとひらさそ氣
引せぬハうろでもい
うまさ

くれてうりまいりてかめんどこ 念誦し看経きまく給ふこ
めづらしさこよのやさよめで 孟 京てハ念うわ精を少く念誦るてハまれ
ひとまへぞ元をそそまろり捨ど家り
あしさ海みとえ出ぞうりなりあしの
浦にてさひまうる浦どるれバうくさ
よれ我居のの入たのしぬて 細 明石工のるく
かえやつさ見れど 孟 入たるさより千松わきるうし
へたぞふさしろかんあしさ海
よさひめんりけおとひとれどうけひ
うざらんのゆくかうろてむもし
くるんむしろうぼさせて のかくせしとく
孟 良清入道
孟 書通之

うミのゆかりのミこそ　細 国守
ミな國守のちすゐ(?)ありて入道のひ
がめる心ハ。かやうのよしもしらで
ざるなり。師 良清ハ前
の播磨守の子にて。今
の播磨守の時にうち
のりなどさへのりけり。年月
へしさも、おもりで年月
とへてのちにいつ細うく
ひがみし。良清とかきたる
ゆかりあれど。何とも思はで
年月をへてとに侍るか
みなし
このきみかくて　孟 源の流
なおはすときゝて入道
の妻にかたりし詞
わこの御すくせ　河 吾子宿世
世 細 入道ひとめのるを
いつ孟入道のひとめ者
世をすて源氏の御下向と逢

しいたうてゆかず。世にしらずこゝろだかく
おもへるに。国のうちハ。かみのゆかりの
みこそハかしこき事にすめれど。ひが
めるこゝろハ。さらにさもおもはで。年月
をへけるに。このきみかくておはすと聞
て。はゝ君にかたらふやう。きりつぼ
の更衣の御はらの。源氏のひかる君こそ。
おほやけの御かしこまりにて。すまの
うらにものし給ふなれ。あこの御すくせにて。おぼ
えぬことのあるなり。いかでかゝるついで
に。此君にたてまつらんといふ。はゝ
あなかたはや。京の人のかたるをきけば。

(頭注)
播磨の国司をいふ
貴きことにするとなり
明石の母入道の北方之
細 入道の北方
明石上の母乃詞
現入道をひかぬる事あらそふ

みかどの御め
みかどの御めをも。へだてなく。
ばかりのほどの事をも
むかしのよしあるかたの
人に。かくなどをもなの
みやこの山かつを
河 史記高祖本紀曰。呂公曰。
臣有息女。願為季箕帚
妾。酒罷。呂媼怒呂公曰。公
始常欲奇此女。与貴人。
沛令善公求之不与。何
自妄許与劉季。呂公曰。
此非児女子所知也。卒与
劉季。呂公女乃呂后也。生
孝恵魯元公主云々
えしりたまはじ
細 妻の言葉に相違する
祖を尋ねよとの時。児女のごと
きりとこのまさにさるべき
ようるる詞也

やむごとなき御めども。いとおほくもち
て。そのあまり。しのび〳〵みかどの御め
さへあやまち給ひて。かくもさはがれ
給ふなる人は。まさにかくあやしき山
がつを。こゝろとゞめ給ひてんやといふ。はら
だちて。えしり給はじ。思ふこゝろ
ことなり。さる心をし給へ。ついでして
こゝにもおはしまさせんと。こゝろを
やりていふも。かたくなしくみゆ。まば
ゆきまで。しつらひかしづきけり。母君
などて。めでたくとも。ものゝはじめに。つみ
にあたりて。ながされておはしたらん人を
しも思ひかけん。さても心をとゞめ給ふ

(頭注)
河 何事かの
養勝月夜のうへ
朧月夜の事也
細 入道腹立まうく
内 こゝろことなり
ことなり
母君の詞
源ハ貴人なりとものゝ心

細　和漢兼作
りうくわすもなどのたぐひの例とみえたり
裏曰　河野相公在納言　菅家西宮左府帥内大臣以才長群賢与衆罪遭配所之月人不可勝計
いよ〳〵知しめのふまうにて
暁　かの尼公の源氏へむかを
めとほりてせんことを歎
きそさらどもかぐゆる例也
あぞさと八尼公なるべして
いかし　細同
さくさくことはへ　暁　桐壺更衣
の父ありきの大納言かの公
入道のおぢ也。大臣の甥也
女の事ありしはまでゑお
ての例を引くし　細公の
乃と桐壺の事をいふと也
孟
大臣―入道播磨守―明石上
按察大納言―桐壺更衣

くはこそあらめ。たはぶれにてもあるま
じきことなりといふにいといたくつぶ
やく。つみにあたることは、もろこしにもわが
みかどにも、かく世にすぐれ、なにごとも
人にことになりぬる人の、かならずあること
なり。いかにものし給ふ君ぞ。故母御
息所は、おのがをぢにものし給ひし按察大納言
のむすめなり。いとかうざくなる名
をとりて、宮づかへに出し給へりしに、
こくわうすぐれて時めかし給ふことな
らびなかりけるほどに、人のそねみおも
くてうせ給ひにしかど、此君のとまり給へる、

おもよつけたる世をばさらに
みえじ
孟　明石上もすこし心高きによて
かくさまの親のかはりにて
人よはりてまじらうことを
ひがくして
海のそこにも入
若紫の巻にも此こと有

いとめでたしかし。女は心たかくつかふべ
きものなり。おのれかかるゐなか人なりとて
おぼしすてじなどいひゐたり。このむすめ
すぐれたるかたちならねど、なつかしう
あてはかに、心ばせあるさまなどぞ
げにやむごとなき人におとるまじかり
ける。身のありさまをくちをしきものに
思ひしりて、たかき人は我をなにのかず
にもおぼさじ。ほどにつけたる世を
ばさらに見じ。命ながくて思ふ人々に
おくれなば尼にもなりなん。海のそこに
も入なんなどぞ思ひける。一所にて

年に二たび御吉野にまうで
ある葉上によるゝへり
えんさくらの桜
おほくの木どもさきて
とかくしたるもみなめ
でし
二月廿日あまり
細　雲年の比ひびしきを見
しおかれて
院のおほしき　帝を
ばえ帝きれどもさらの
ひと朱雀院をとふて
しての今のおほすれば院
といへり
りうりれくと　細

やひしつさで年に二たびの御吉野に
でさせ給ひ神のはなゝしぬきゝ人それ帝
そのまゝひりうも御中は年よりらく
日をすくつれどなりなるへし花年の桜
かのまさきのめでゝそれの花ちかう
らくれるにまさびけのしなしまそれて
しらすき給ひしく廿日あら二月廿日あ
まらいあし年東をまかれしはんかぎし
かしんぐの御あり御前にいきとひ
し南殿のさくらいまよりぬれん
一年の花乃えんに院のはなかしれらの
えんのひしきりしよたぬめいそてよりつ

りふ文字おうれりとのさ
まつる所のうしく
いうもすく　細　両殿の古来
人ハいうまあれや桜きぎ
しそるもくりしつの遊
咲桜がざしくハ花宴ます
なり
世中いと哀と
源の次二ゐはおりもちちを
とひきりつるん　おが中ね
ハ源と他よことなら　朋
おまそみやにおりて
しのうつしありて
中ね源とへまうんとお
のまさまかて　お太武の哀
らぐりしハ左右の左を
西しうもろし此中ねのお
ちしろハ朋友の信あり
ゞ宰相よかけしうく
られしきうも　細
さもうきもんハひとり
まそかれぬ物そ御く
たり蓑又相一ちりとく
師源よまうれありがそ

まうく後もじ給ひしと右のゞくこゝそ給
源氏
い川よりすく大くん人の春いまいよけて
ぞまうてすみもさまなりいとつましくなる
よ大殿の三位中将もし今ハ宰相よかりて
人がくのいとりけまで時世の花を花
めくてすのしまへど世中いと哀まかぢ
きうすくかのかりごきよ逢しく花宴
へばこのさてありてつらまあくうとを
いうぞをとんと源氏紬て中は御よりすかう
で給ふちうきうかめづらしくられしさ
みも、ひとり朋そうでおうち梅
色うさまい、いとんとすくるめきこまり

うこきあり。今ハく盛久
ますかもうれしさと
なけわめの姫。細かうかめらさ
るさ庵之。五架三十石新草ノ
堂石階ニ松柱竹編ノ牆天楽
師樂天家炉峯のもとに
山居せし時の詩の句をを
ゆう書まつりうり
ゆかしき色 細 源の衣裳せ。
花なるよ舞。ゆかしき色のう
うきあびの縁束と
いふべきとてえんしきを
出て后よ衣裳の名を
かもり、ゆかしき色ハもと紅
どいつく黄ばかりとハ
うとられなられきたう
うまよしれあく三善清
行禁ヲ深紅衣服ヲ奏議ニ云
但浅紅軽黄未ダ及火色ニ
者不在制限ニ云く黄ばか
なりとハうすき色なるを絶ハて
まづよあきけのまれわう
きこしうりみとうらき
こいハ花のあり同事く

雨の夜ハよろこしらんやかたらよ竹
あめの姫ぎみもしろして石のきし松のもし
ら、よろそしるらおもくめつくりされりし。(兼相云ウしろ向きてゐて)
やまぶりめでてゆかしき色のきびしげなり(花ゝら源の衣裳の中をとりて)(兼季云さてやうなよ衣を)
よあをめでびのかりこさぬさしぬべくちや(あびのくちきさししわきなら)
つれてごしさこにいかりびりておふしまゐる
しきいうじうさらよ思はれてさぶしる
まどりつゝひ給へるでござりとりそめ(販き)
みて紫の雨もあくてよさられらゝ
ごぞうらくのごんでしじさのくふで(盤せ)(調度)(石馬のさぐり貝し)
お中わざまおさして給んとのぐさらひ
つとり給くりしさしより物もいまうなど

ごぞうくのごんでうどくさのぐ　孟冊碁尭造之教子丹ニ 籙六 孟嘗 造ル之ヲ弾碁 後漢
書梁冀能挽満弾キ行河よ云し今日本よ弾碁ハあかし 義 弾碁今の世よハつき
ちくぬあり 師一流りそぞさえく
りのまいわう秘 供給なじとろそうず おもしろくあまつけよかさ雨よ志あして中らく

真あうとく
あうかりしてなつりの
何求食ニ 万葉 なつ川ハなうさ
しうら摘なら或ハ海漁る
祇園カ奇抄ニ云 海人の名つ
とのうちとハあさりするを
いふ 細 海士のなづきさ
なる摘ム又海物とし 唯 貝なる
どもを取るも秘むなる也
私お 孟 貝 海藻などし
心のゆく志ハあるしこと
世の中ハそもうくてま
みあしるすえもわるやも
そうしあなんで雲の身
の数をまゐらひて人なの
身をうらねんのゆくさへ
法や中将よ此海士の身
も秘あるすちなぶと歓会
しりめくし
れぞとまるべけ 嘗にきま

こゝろ雨よつけ、なつあうてあらし
さう、わまどもあさりしていさ川摘を(海士が首も海摘を拾ひ)
てまいおつるとめいぞでいくんぞ海よ只
しうつさ海なじとそよせあさなきぐや
なげるきさ身のうれへをもしとそこともう(細 海士のそでづる)
とうくさえづうも心のゆく思ハあれど(何海士の細きまけなきさ衛く)
こゝろうれとあきれよまふ、れぞと
きら川げさをお纸いげうひあり思
つり、出馬どもちろうしそてきやまる(孟 入きとすもし)
寄らくらなまよそなら、いねどもども

出てかふなど。めづらしうみ給ふ。あすかゐすこしうたひて。月ごろの御物語。なきみわらひみ。わかぎみのなにとも世をおぼさで。ものし給ふかなしさを。おとゞのあけくれにつけておぼしなげくなどかたり給ふに。たへがたくおぼしたり。つきすべくもあらねば。なかなかかたはしもえまねばず。夜もすがらまどろまず。ふみつくりあかし給ふ。さいひながらも。ものゝきこえをつゝみて。いそぎかへり給ふ。いとなかなかなり。御かはらけまいりて。酔のかなしび涙そゝく春の盃の裏と。もろごゑにずんじ給ふ。御ともの人もなみだをながす。おのがじしはつかなる別おしむべかめり。朝ぼらけの空に。かりつれてわたる。あるじの君

ふるさとをいづれの春かゆきてみんうらやましきはかへるかりがね

宰相さらにたちいでん心ちせで

あかなくにかりのとこ世をたちわかれ花のみやこにみちやまどはん

さるべきみやこのつとなど。よしあるさまにてあり。あるじの君。かたじけなき御をくりにとて。くろこまたてまつり給ふ。ゆゝしうおぼされぬべけれど。風にあたりてはいばえぬべければなんと申給ふ。世に

醉悲灑涙春盃裏吟苦支頤暁燭前 花 白楽天か詩也

越鳥巣南枝 なるハかく胡國の獣也。仍北風にあたれハ旧里をしたひていなゝくなり 細 胡馬
嘶北風 故郷を思ふあり 愚按この詩文選にある也 越鳥依南枝とあり
ゆゑに去のび 形あるへく
孟 此留ハ三位中将の事なり 細 此留ハ中
せられさるへし 妙 此留ハ中
将の伴人なれとハいゝし
き留の名ありけるなと
ゆゝりとあれハ源より
ゐると聞えとをそへり給
ふ元 師 源よりゐると留
あまつかり中将へまいる
をられし
かくさふへしのあひ 聞ハ字
まへ中将の前の御ともに由
あひと御 まさしと品をそ
とゆへも留を留などハかり
ふにはかへのともむまつき
やうよしまゐるとく 細 露よ三位中将
雲ちらく とかりていかり雲ゐるはるく
さゝかしひ給へきまく我ハを
わせる罷をなかるさ身なりと
なり 師 雲ちらく 八雲御抄
のかくしらかなのかし

孟 一段の名残より
ありけるさけられ馬の、心ならぬ事ばかり、ことに
西段
なのめならず、いとゞさのみえのこゝろあり
けるかなしきに人とかめ侍べきことは
此夜さつめて明暮てと松の
そゞろにえし給はず。日やうやくさしあ
始かしこのうふんあり
がりてこゝろあかくなりしかれハかくを
中将御去く
のこし河へ出まかせ、こゝをくり給ふ鳥文
細 源の御こと
いとあかくなりて河もこほりかゝり給ふ
細 三位中将の御こと
らんともかんなりともうて いやとなし
と給ふおりし

源
雲ちらくとびかふ河を霞よそよ我ハ
春日のをかりなるさ身ぞハ河ハよのまれ

河ハよのまれ 細 我ハ罷ならさ身とおもへともゆるべきかんなきくてそおもへども、芦なりしを
とのかくなる人ハかれなりとも聖廟なとにこそさいなかりしやと思ふ 孟 河ハく
ハかく御来せんといへるなと

ちかき 細 ちぶかなき
なく露に旅なり花は
ちかさなみ しかも源氏
よりうへより 河 ちろ
なきぬへとさして
ひさうらふ 方妙廿十ぬ
いとしめり 細 ちなとそい
うしも人よむそれ以去ら
あうさいてそうねむなかき
そひの一日よ 細 上巳の
とく人へや河海よ禊 明 河
去漢代三月上巳日百官禊
流水上禊飲 自魏以後
用三月三日不用上巳 鄭國
俗桃花水上以上巳祓除

咄 菅家に桐あれり又其名の号あるそも 細 月
かうて此あたりの人はむつかしうこそ人ずよ
ちかくしうせにも文まじらふとてくうてぞ
孟 此てふまてかよ文ろハさのすれなりしとふまあり
これにならふやこのさうひをむさえんと
めんといひ給ふぬなとこの給ふ、寧桐
ふ河のかうをさ雲井にひとつね。とたまつく河
中将廻つきさうすへし夜と心
やうさうへし、夜をあつまづけすれ
しと柳とそれさうる御こと
うらそれ給へ、いとしくらやまつさまへ
かうかかり給ふくれし、ふあやうなまもめで
源の御こと
くりてゐるさ、名所いそぎつしうなりあくて
し給ふやまひのついさちにいでこゝろその

○不祥ナル事　細つゝしむ　源よなき
○軟障　どのやうなるもの也。他本には
ハぜんじやうとこそあるなれ
ぜじやうとす。拾芥　明河
云軟障有畫圖松也。謂
ニ松軟障ト。堂上ニ立ツ軟障ヲ
堂下ニハ引ク幔ヲ。又堂下ニモ有
ニ之内宴殺楽之時ト云々
一注幕のごとくなるものに
なるされなど絵にかきて壁
に懸て引也
此國にかよひける陰陽師
河海　法師陰陽師播磨ノ国ニ
あまたありけり　細　青、多く
は陰陽師醫師などなり
きけり。河海に云法
師のかうぶりをつけて
夏祓ハ五入道右府是を
とんでいふと。しかるべしと
思ひのほかに
しらざりし　細　ひとかたに
はからひそ　今も有く
此日のかたしろ　人形の祝

ひ。けふなんかく思すことある人ハ。みそぎ
したまふべきと。なまさかしき人のきこゆれバ。
海づらもゆかしうて出給ふ。いとおろそか
にぜんじやうばかりを引めぐらして。こ
のくにゝかよひける陰陽師めしてはら
へをさせ給ふ。舟にことごとしき人かたのせて
ながすを見給ふにも。よそへられて
しらざりし大海のはらにながれきて
ひとかたにやハものハかなしきとてゐ給へる
御さま。さるはれなる所にいでてハいふよしなく見え
給ふ。海のおもてハうらゝとなぎわたりて。
ゆくへもしらぬに。こしかたゆくさきおぼしつゞ

左也　明　人形とも　孟津の人形ハ一つさすらへ人形にまへ
あふらく
かれはいそぐ　細　晴ゝ
やほよろづ神　細　桜ぞ
この前なり　嘆　八百万の
神書にみえたる詞
ハ　八百万神世ゝある
御神をいふて
その神ふかく　細　嘆　琵琶の
心にかなふて風雨の変など
ものゝしらんハ源氏の
今昔物語にいふ
あまりに天も感じて
天変あるのさとしあり
て源氏須磨の浦と名れ
おぼしめして立は
あそびつされハ織に吹出
るく
ひぢかさあめ　何　さまもとり
あへずして袖をかづける
ようし　師　傘に似る

けられて
やほよろづ神もあはれとおもふらんおかせる
つみのそれとなけれバとのたまふにはかに
風吹いでて。空もかきくれぬ。御はらへも
しはてず。立さはぎたり。ひぢかさあめ
とかふりきて。いとあはたゞしけれバ。みな
かへり給はんとするに。笠もとりあへず。
さる心もなきに。よろづ吹ちらし
またなき風なり。波いといかめしうたち
きて。人々のあしもそらなり。海のおもて

かくまで 細 波の中宮を
いふ也 私云 道成集ニ女
院の御まへにて雪の山つく
らせて侍るに
冬の袖にちりまがふものを
定家明月記云 雨脚甚
飛電光張天
細 よのつね
の風ハ吹て後にこそ吹す
もあれ
風也

はふすまをはりたらんやうにひかりみち
て神なりひらめく。おちかゝる心ちして
からうしてたどりきて。かゝるめはみずも
あるかな。風などはふけどけしきづきて
こそあれ。あさましうめづらかなりと
まどふに。なをやまずなりみちて。あめの
あしあたる所とをりぬべくはらめきおつ
かくて世はつきぬるにやと。心ぼそく
おもひまどふに。君はのどやかに経うち
ずんじておはす。くれぬれば神すこし
なりやみて風ぞよるもふく。おほくたてつる願の
ちからなるべし。今しばしかくあらば

ちらしける 細 大伴の皇子其
比波風吹くたりしかと
細
姫と
八尋
へ石の
海神
源氏
容顔

波にひかれていりぬべかりけり。たかしほと
いふものになん。とりあへず人そこなはる
るとはきけど。いとかゝることは。まだしらず
といひあへり。暁がたみなうちやすみたり
君もいさゝかねいり給へれば。そのさまとも
みえぬ人きて。など宮よりめしあるには
まいり給はぬとて。たどりありくとみるに
おどろきて。さはうみの中の竜王の
いといたうものめでするものにて。みいれ
たるなりけりとおぼすに。いとものむ
つかしう。このすまひたへがたくおぼし
なりぬ

に三年留りし也。日本紀にみへたり。又日本武尊東夷を征しをはりし時相模の國
より上総の国に渡りたまひしに龍神むかへて尊をとりまいらんとしけれは波あらくさ
御船沈まんとせしに橘姫尊の御命にかはりて海に入たまひて危難をまぬか
こゝをもて走水といふとそ　○明石への浦の書あとづき発端なるへし